



道

求

第
六
號

第
拾
壹
卷

求道第拾壹卷第六號目次

求道

軍國に於ける信仰的態度

講義

◎『教行信證』信卷(菩提心釋より)

近角常觀

第四席 菩提心釋

一、掌を反したやうに喜べる 二、お慈悲がこしらえものになりて信ぜられぬ 三、私と佛と兩立せぬ 四、眞友のま心 五、擲取不捨のこころ 六、思召一つが有難い 七、開持記に云はく 八、不可思議光佛 九、自障自蔽 一〇、疑いは必ずはれる 一一、未だ始めより開隔せず

告白

◎さぞ悲しからふ、尤ぢや

徳田 潔

◎知り抜いて見捨てぬぞとの御一言

葛西 諦導

◎ふり上る手の下から涙を以て見て、

下さる

山崎 震雷

◎傳道感話

雜錄

近角常觀

◎信心の正因

講話

近角常觀

◎求道講話概況

時報

講

求道學舎

毎日曜午前九時

(本郷區森川町一帯地)

第二 求道會

毎土曜午後二時

(九段坂佛教俱樂部)

第三 求道會

毎月二日午後七時

(日本橋區板町説教所)

求道 第拾壹卷 第六號

軍國に於ける信仰的態度

○吾人は軍國の状態に入りて、此に信仰的態度を明らかにする必要がある。何んとなれば此際に於ける國民の覺悟如何は、慎重に考へねばならぬ大問題である。

○劈頭吾人が喝破せねばならぬことは、國民は日清戦争日露戦争の時に比較して、何でも朝飯前の仕事の如く考へては居らぬか、心驕り意満ちて居るといふ様な氣味が少しでもないか、若しや一點にても其様な傾向がありとすれば、猛省一番せねばならぬ。

○兵は凶器である、之を動かすは固より悲むべきことである、然れども人生の相對的なる必然の結果として、此一大慘劇の避くべからざることは止むを得ざることである、否干戈を執りて立たぬければならぬといふ一大信念の發動によりてのみ、奮起すべきものである。

○今や歐洲の天地は硝烟を以て蔽はれてある、かゝる時に於

ける我國の態度は如何にすべきか、若し直接砲彈の我國に達せざるの故を以て、強て無關係の態度を装ふて、一時を塗糊するといふが如きことあらば、眞摯なる行動とは言ふことが出来ぬ、たとひ兵は慘事なるの故を以て、強て避けて安逸の地に就かんとするは、寧ろ狡猾の態度と言はねばならぬ。

○然らば此歐洲の大争闘に關して、我國が爆發の最初に於て左右其一を執るといふことを宣言せねばならぬといふことは眞に眞面目なる問題と言はなければならぬ、日和見をさめこみ、風向きを考へて左右を決するといふことは、一點も許すべからざることである、然らば吾國は劈頭に於て一點の躊躇なく、敢然として其態度を決したることは、此一大信念の發動と言はなければならぬ。

○既に一大信念の發動によりて宣戦したるものたる已上は、一點たりとも成敗利鈍を見て動くといふが如き、浮薄の念あるべからざることである、若しや好機乗ずべしといふ様な、火事場泥棒の觀念を雜ふるが如きことありとすれば、信仰的態度に於て大に缺けたるものと謂はねばならぬ、是吾人が大に痛言せんと欲する所以である。

○吾人は信仰なるものは、人生相對的事件に對して、極めて

眞面目なる行動を執らしむる唯一の力なることを斷言するものである、吾人が常に極言するが如く、人生問題より入りて信仰に入りたるものは、必ず信仰の立脚地より人生に出て、最も眞面目なる立場を執らしむるものである、其眞面目といふことは、單に正直なとか、比較的僞が少いといふことではない、絶對的態度とも云ふべきものである、此の如き場合に於ては此の如く爲さざるべからずといふ、唯一の態度である、故に極言せば、人生問題の一一に於て執るべき行動は、必然此の如くあらざるべからずといふ絶對無二の一途あるのみである、猶詳述せば若し徹底せる絶對の信仰に住せるものなれば、一人生問題に對する見解は、期せずして符節を合せたるが如くあるべきである。

○此絶對無二の態度は絶對無二の信仰によりて生じ來るものである、疊をたゞきても南無阿彌陀佛、襟をたゞきても南無阿彌陀佛といふことは、人生の二々が信仰上の立場より一絲亂れず、必然かくあらざるべからざる道あることである、世人は相對の一一が皆何れも南無阿彌陀佛の恵みたることは言ふが、南無阿彌陀佛の恵みは、一一相對の事實となりて、神聖嚴肅なる意義を實現し來ることを忘れてはならぬ、資生産

此清淨眞實の御心の下に、行藏、出沒、動靜、進退するの途が自然に開け來るのである。是人生相對界に於ける神聖なる行動と名くべきである、是一心歸命の信仰より流れ來る行爲である、所謂孝子の、父母に歸し、忠臣の君後に歸して動靜己に非ず、出沒必ず由あるが如くである。

○戦争は慘事である、兵は凶器である、されど不眞實不清淨の人生に於ては、避くべからざる現象である、かゝるあさましき罪業である。されどかゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬる我等ごときのだづらものを、たすけんとかひまします、彌陀如來の本願にてましますと深く信じたる已上は、最も眞面目に、最も神聖に之を運用せねばならぬ。故に我國に於て必然信念の命ずる所によりて宣戰したる已上は、最も嚴肅に、最も眞面目に、一點も心驕り意滿つるの態度あるべからざることである、機に投じ、一時に僥倖するの念あるべからざることである。獅子兎を撲つに全力を用ゐるといふことがある、況んや此の如き禍亂は世界の動亂である、將來如何に進み行くかは不明である。此の如く群賊惡獸異學異見別解別行の動亂破壊せんとし、貪欲の波、瞋慧衝突るゝ來りて道を濕し、道を燒くの間に於て、仰ぐ處は如來招喚の聲であ

業是實相といふことは、單に世間の實業商業産業を以て佛法なりといふことではない。信仰の上より必然紊るべからざる法則の下に、自然に運用さるる神聖なる資生産業を意味するのである。兎角、世俗相對の事物を妥協して是實相なり、信仰なりと倣ふる意義に用ゐることではない、絶對無二の信仰より、かくあらざるべからざる神聖なる資生産業を意味することを忘れてはならぬ。

○勿論如何に神聖なる資生産業といふたとて、抑々人生世俗の事物が純然たる清淨眞實といふことではない、吾人の信するところによれば、唯一の清淨眞實は眞佛である、唯一の清淨眞實土は無量光明土である。此世界は穢土である、人間は穢身たる已上は、此世界此人間に於て眞の清淨とか、神聖とか言はるべきものは一もない。あきない、奉公、獵漁は、かゝるあさましき、罪業である、あきない、奉公、獵漁が罪業たる已上は、教育家が月給に衣食するも、宗教家が信施に生活するも、亦名利資生の罪業たることを忘れてはならぬ。唯此の如き不清淨不眞實の人生を悲憫まします眞實清淨の御心を行たゞくことの二つが、此人生に於て絶對無二の唯一の途を行かしむる力である。此に於て如何なる人生の場合に於ても、

る、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、水火の難に墮せんことを畏れざれの仰せてある、我等一心に直に進んで道を念して行くのみである。

○聖人が朝家の御ため國民のため念佛まふしあはせさふらはめてたくさふらふべしといふは、必しも世間に順應して行動せよといふ便宜的妥協的教訓ではない、寧ろ世間の一切をして信仰的たらしめよとの教訓である。さればこそ他のことをせよとは言ふてない、念佛を申し合はせよとの聖訓である。念佛せよとあるからといふて、必しも口稱念佛のみと執すべからず、要する一心正念の信念を以て働くことである。信仰を以て政を乗るも信仰を以て算盤を取るも、信仰を以て筆を執るも信仰を以て戟を執るも皆是念佛である。されど信仰其物なくんば政治何かならん、實業何かならん、たとひ念佛たりとも亦何かあらん。故に聖人は直に續きて、往生を不定にちほしめさん人はまづわか身の往生をちほしめして御念佛さふらふべし、わか御身の往生一定とちほしめさん人は、佛の御恩をちほしめさんに、御報恩のために、御念佛ころにいれてまふして世のなか安穩なれ、佛法ひろまれとちほしめすべしとちほえさふらふと仰せられてある。

○嗚呼信仰なる哉、信念なるかな、朝家の御爲になるも信仰である、國民の爲になるも信仰である、政治も、實業も、軍事も、念佛も、皆此信仰より出て来る御報恩である、知恩報徳である。故に御報恩の念佛は、自ら國家安穩も、七難消滅も禍亂平定も、世界の平和も自然に持來さるゝのである。此に至りて我先人日露戦争の當時宣戰の當日より、毎朝特に阿彌陀經一卷を誦して、終焉の病床に至るまで無意識に之を絶たざりしことを想起して、覺えず嗚咽聲を吞むて、身神爲に森嚴戰慄す、矣。

吳にて之を修め、船中筆を執り、御手洗港にて稿了、九月七日

至誠而不動者未之有也

吾學問廿年齡亦而立然未能解
斯一語今茲關左之行願以身驗
之若乃死生大事姑置焉己未五
月二十一回猛士

至誠而不動者未之有也

此語高大無邊な聖訓なれど吾未能
之信也此度此語の修行積る積也
此事別一書ヲ作ル積ナレバ暇ナ
ク候子遠和作へ御通可被下候
于大兄足下 松陰

「〜」と云うて居るも、裏と表との違ひで、同じである。處が然らう言うて居る者が一度此の慈悲に値はせて貰うてみると、「このやうに罪が深くていかぬ」と言うて居るに對し、計らんや「其の罪深く、惡の止まぬとこが可哀相で」との大悲の仰せである。私共之をお聞かせに預りて、「私の是れ程惡しきを、そこ迄お見捨て無き仰せか」と一念頂くと、今迄とは實に黒と白の違ひで、掌を反すごとく喜ばせて頂くことが出来るのである。此間私は雨風の日に然う思ふた。私共が雨風の日に傘をひろげて、雨風に逆つて進んで居る。そして最後迄風力と角力で、遂に風の爲めに傘をあべこべに取られて仕舞ふたと同様で、佛の遣る瀧無き仰せは、初めから私の仕て見やう無きを御存知下され、私の先きの先き迄が案ぜられてならぬとの廣大の仰せなのである。夫れと、夫れに飽く迄刃向ひて、其の仰せの方には何處迄も耳を貸さぬ私共の心と、サア彌々手つ張り合ひて、最後に私の方は「自分のやうではいかぬ」といれ出し、「これでは逆も駄目だ」とあとしざりする。設へあとしざりし、しりごみしても、向ふが飽く迄其者を放さぬとの廣大の思召の故に、とうど此方が追ひ詰められ、「さては斯るありがたい思召であつたか」と一念氣がついて見ると、其の一念に腹底より満足せしめられ、今迄とは心内の光景が一變して来る様は、實に手の平を反したか如くである。私は始終この事を「手の平を反したやうに喜べる」と言うて居て、今此の御言葉に接し一入難有く頂くのであります。

二 御慈悲がこしらへ物になりて信

講

義

「教行信證」信卷

(菩提心釋ヨリ)

(第三回夏季求道會)

近角常觀

第四席 菩提心釋

一 掌を反したやうに喜べる。

前席の元照律師の文は、私共何氣なく讀むも、聖人がお見捨て無き廣大のお慈悲をお知らせ下さるにつけ、一席以來の法照禪師の『五會法事讚』の文と共に、著しき文であると頂くこととあります。次ぎは、

律宗用欽云、說法難中、良以此法轉凡成聖、猶反掌乎。大爲容易故、月淺衆生多生疑惑。即大本云、易往而無人、故知難信矣。

法に値ふことは難事であるが、中にも此法に値ふことは良に難い、此法は實に凡を轉じて聖とならしむること、實に掌を反へすが如くならしむる法である。これは私が常に掌を反したやうに喜べる、といふが之れであります。私共が此世にありて「自分のやうなことは仕やうが無い、世の中から捨られて仕舞ふ」と泣いて居る。反對に「自分は之でよい

せられぬ

さて之につき斯る席で申すは不適切かも知らぬが、是非一つ聞いて頂き度いことがある。先日九州に参つた時、貝島さんが聞きに来て下され、お慈悲のことを話したら、友人の親切を語りて、非常にお喜び下されたのであります。言ひかけたから何もかもしませんが、貝島家にては今春お子さんが亡くなられた。併し何分日本で名高き、あれ程の仕事をせられた方であり、殊に始終鑛業上大膽な企てを仕て居られる方であるから、お子さんが亡くなられた爲めといふても無からうが、兎に角近頃鬱鬱と居られるといふので、同家の會社にお出になる人々、即ち皆さん御存知の峠さんも其の御一人であります。又其の御友人の赤松さんなども、何うかして法を聞かせ度いといふので、色々心配してお出でになつた。即ち私が門司を渡ると、其の御一人が有田君と一緒にお出になつて、私は九州に渡るなり、其のお話を承つたのである。夫れから私は福岡に於ては、貝島家と御兄弟の間柄なる原氏の宅に泊めて頂いて、其處でもお話した。其處へ貝島さんの弟御の嘉藏氏が、態々聴きに來て下されたのであります。斯くこれ程身邊に於ては因縁が熟して來ても、肝腎の御主人は一向聞く氣が無い。私は嘉藏氏と汽車に同乗して「來年お出であつた時は、何うかして兄に聞かせ度いと思ふ」といお話でも、何人も此のお慈悲を聞くと直ぐ安心が出来るのだから、來年といふて暇はあるまいと思ふ」とお話した位である。夫れから私は有田さんの御兄弟が麻生家にお出でになつてゐる

ら、其の因縁で麻生家に参つてお話し居つた。すると其の折丁度貝島家で何か宴會があつて、麻生家の御主人もお出になつて居た。すると其の席でお家の方から麻生氏に是非勸めて聞かせるやうに仕て呉れと、切なる御依頼であつて、又赤松さんなども側から「是非だまされたと思つて一邊聞いて呉れ」と頻りに仰しやる。御主人は麻生氏に「夫れ程言うなら聴いても見やうが、全體お前は金儲けばかり考えて居る男だ、それに坊主を呼び込んで、何か利益があるのかい。」とやうの話である。麻生氏は「ウンそら大にある、大に金が儲かる」「ウンそんなら一つ聞かうかい」と、ついでこんな事で麻生家迄聞きに来て下さる御縁が開けたのである。てこは餘談に亘るが、一方青年の方の爲めに言うに、今日世間で成功者と言はれてるやうの人には必ず普通と違つて非常に眞面目な處があるのである。皆な確した考でやつて居られるのである。て其の時貝島氏が私のとこに来て仰しやつたことは、「自分は寺をも自分で建て、法主に迄来て貰つて親の法事も勤めたのである。又兄弟の者も法の心懸け篤いのであるが、自分は何ういふものか佛が信じられぬ。嘗つても信じられるものなら信じ度いと、或る僧侶に来て貰つて二週間程も聞いて見た。聞くと釋尊の有難いことは如何にも分るも、何うしても阿彌陀佛が分らぬ。其だ無遠慮な言ひ方なるも、最後は成る程釋尊の方は有難いが、其の釋尊も自分を拜めとは言へぬから、假りに阿彌陀佛なるものをこしらへ上げ、其の阿彌陀佛を信じよと言つたものだと思つてしまつたらもうこしらへ物になり、何うしても、信じられぬやうになつて仕舞うた」と

を尻に引いてしまつて居る故分らぬが、然るに佛は此方がさうすればする程彌々其者に知らさうと、飽く迄呆れず益々哀はれ／＼と向うて下さるお慈悲の故に、遂に如何なしぶと私にも「さては夫れ程言うて下さる向ふの親切であつたのか」と、一念氣が就いて來ると、もう向ふのお慈悲に頭が上らなくなつて來る處の有様は、實に凡を轉じ聖となすこと、猶ほし掌を反す如くなるをやである。我々自分で頂くのだと思ふと至難であるも、此のお慈悲は向うより私の之れ程しぶとさを、夫れを飽く迄哀はれみ、お見捨て無いと聞くと、もう謝り果てるばかりである」と、此の意味のことをお話した。

四 眞友のま心

すると此時貝島翁が感じて、此の時の話が私身に泌みて有難かつたのであります。夫れは「自分の友達に三阪又七なる墨屋があつて、小供の時よりの友達である。始終自分に「何かこのお慈悲を頂いて呉れ」と言つて呉れて、現に寺が三阪のすぐ隣りなるに係はらず、寺参りの度びに態々廻り道して自分のとこに寄つて來て、而も何氣なく通り合せた風して、「一緒に寺へ行かう」と言ふ。自分は心中又呼ぶる來たなと思ひつゝも、義理に引かれて十邊に一邊は行く、併しもとより本當に聞く氣で行きてるので無い。處が數年前より自分は淨瑠璃の稽古を初めると、又わしも一緒に稽古するとして自分の宅にやつて來て、一緒に淨瑠璃をやりよる。そうして中或時自分に向うて三阪が言うには「わしも此の年して今更淨瑠璃の稽古でも無けれども、實は斯うして居る中にお前に

斯ういふ言葉である。一面随分無遠慮に淺間しいことを言はれたものと思はるゝ方が有るかも知れぬが、夫れ丈け實に思ひ切つたお尋ねだつたのであります。

三 私と佛と兩立せぬ

て其の時私は突嗟の間に申した。それはあなたの考え方が間違つて居る。全體あなたを佛を信する信ぜられぬなどと仰しやるが、然らう言ふ我々と佛と兩立するものぢや無いのである。我々自分の方が偉くなる時は、今あなたの言はるゝ如く、佛迄がこしらへ物になりて消えて仕舞うし、其反對に佛の方が偉くなる時は、長々仰心配かけて濟まぬとなりて、自分の方が倒れてしまひ、即ち佛が立つか、自分が立つかの話なのである。而して佛が立つ時は自分の方が頭が下り、今はあなたが立つて居らるゝ故佛が成り立たぬ。處が譬て言へば我々が危篤の病床に居て自分の危篤を知らずに居る時に、向ふより一人の人來り、「お前はどうか思つて居るか知らぬがもう危篤ぢや、故に御前の爲めに此の藥をやる」と渡された時には、「あゝ有難う」となると同じく、私共自分は確なる床の上に居ると思つて居る間は、有難いことも何も無けれども、其の床が今砕けるとなれば、其の墮ちる者を救ふとの仰せが、實に有難いでは無いか。私共自分を高きに置きて、佛を「あゝか斯うか」とこさえて居る間は分らぬも、今彌々自分は危篤の病者であつて、夫れを飽く迄お見捨て無きが佛のお慈悲となれば、もう其の飽く迄お見捨て無き思召と、私共のしぶとさとの角力なのである。而して私のしぶとさの勝つて居る中は、佛

法のことを聞いて貰へやうかと思つてやつとるのである。故に何うか之れ丈けは聞いて呉れ」とて、眞面目に法の話を出して呉れた。併し然らうして呉れるは有難いと思へども、何うも自分は信じられぬ。處が昨年三阪が胃痛にかゝつて、福岡大學に入院して、手術を受けることになつた。處が其時丁度寺の御遠忌を勤めることになつて居たので、どうしても一度歸つて御遠忌に御禮をとげ度いと云ひ出し、無理につれ歸つて來て拜禮をとげ、非常に喜んだが、其の病院に歸らぬ中にとうど危篤になつて仕舞うた。其の中時自分が行きて病床を訪ねると、大變喜んで自分の手をとつて言うには「一代世話になりてまことに難有かつたが、今度は自分も彌々出かけるのである。就きては長いこと言ふたのであるが自分は彌々今度は先きに淨土に參らして貰うから、何うかお前もあとから間違はぬやう屹度來て呉れ。待つて居る」と言つた。處が自分は信じられぬもの故、作りごとを言ふ譯けにもいかぬ故、「貴様は喜んでたから淨土にも參れやうが俺は一代世間のこのみやつて來たから、行けさうにも無い。まあ貴様こそ安心して參れよ」と言つた。すると今にも死せんとする友は情けなさうな顔付して、「そんなことを言ふもので無い。そんなこと言はずに、是非來て呉れ」と泣きながら手を握つて言うて呉れたが、遂に其中に亡くなつた。今考へると彼の言つて呉れた親切がよく分る。成る程彼は自分の爲めに言つて呉れたかと思ふと、長い間心配さして自分は實に濟まなかつた。自分は一昨年も昨年も子供に死なれたのであるが、子供の死ぬだ爲め煩悶するからでは無けれども、自分の親は父母

ながら猶ほ微賤の時によく法を喜ばれて、微賤の中に深き満足を持つて居られた。それが自分は外のことは種々やつて来たなれども其の親の喜ばれた法を自分は信ずること出来ぬと思ふと、残念でならぬ。又小供が死ぬたを今思ふにつけても、自分が分らなだもの故、臨終の時一遍の念佛さへ稱へさせてやらなかつたと思ふと、今更實に可哀相に思ふと斯ういふ話である。即ち多年自分が佛をこしらえ物に仕て置くこの根性に、夫れ程迄に言つて呉れる友の親切であつたかと氣がついて來ると、もう自分の方から折れて言はれた言葉だつたのであります。

五 攝取不捨のこゝろ

て其の時私は申した。「今佛のお心といふが外で無い、三阪翁の其の親切が、即ち佛のお心が直さく現はれたものなのである。年とりて今更淨瑠璃の眞似仕度くは無けれども、心にも無き淨瑠璃の眞似して迄言うて呉る、友の心が、即ち佛が私共に聞かせたやゝの思召一つで長く御苦勞し下さるお心である。而して其の遣る瀬無き思召より、

釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、

われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり。

「斯くもしたら」の遣る瀬無き思ひより、何氣なく門前を通り合はした風は仕て居るなれども、實は態々向ふは其の爲め出て來て呉れてるのである。我々親や子を失うた時、偶然死なれたと泣き悲んで居るのであるけれども、何ぞ知らん、子供の死んだは親をお慈悲に手引きして呉る、救ひの心であ

にぐるものを追はへとらんとみ佛の心を友の言に見るかな。

二首の歌を書いたら、翁は深く喜ばれ「之を掛け物にして一代信仰の手本にする」と、深く御満足されたのであります。阿闍世王入信の時は、釋尊は善友耆婆の導きによると仰せられたとあるが、今翁は、三阪翁の切なる友情の爲め平素何等の心懸け無き人が、斯くは掌を反した如く、こゝろりと折れてお見捨て無き思召をお喜び下さるのである。歸來三十餘日になるが、其後どんな御様子かと思ふが、まことに近頃の有難き御法縁であつたのであります。

六 思召一つが有難い

又それから其のあと翁の宅に參つてもお話して來た。夫れが又妙で、斯く一度お慈悲が開けて來たら、今度は「それだからもつと聞き度い」といふ風になつて來られたのである。そこで私は最後に「ひと度お見捨てなきお心が分つたら、さう何時迄も聞き度いこと無、今あなたに對する三阪翁の心がやるせなき御本願のお心其儘なのである。又親はあのやうに微賤の中からお慈悲一つにも満足して居られたに、自分は喜ばれぬで残念だと言はるゝが、夫れが即ち直さく親が、何程成功して呉れてもこのお慈悲一つを頂いて呉れるで無ければ、親は本當に満足出來ぬと言つて下さる親の親心なのである。又おちさんが死なれたに仕ても、斯く何時知れぬ世の中も、早くお慈悲を頂いて下されと、向ふから親切に言つて呉れる有様でないか」とお話した。すると言は

つたと氣が就いて見ると、長々三阪の言つて呉れたは、此の慈悲を自身に頂く上より、何うかして知らせたやゝの佛智不思議の佛のお心が、其の儘三阪に現はれて下されたものなのである。爾るに此方は夫れ程言つて呉る、向うの親切を今日迄斥けて

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、

大菩提心おこせども、自力かなほで流轉せり。

今日迄夫れ程向ふの厚意を飽く迄無下に仕て居るもの故、向ふは猶ほ以てあぶなくては捨て置けぬ。彌々自分は今はの瀬戸際に臨んで「サア之れ丈けは是非聞いて呉れ」と言つて呉れる。にも係はらず此方は飽く迄人ごとにして「俺は參れそらに無いから、まあ先き貴様參れ」といふ。若し之が信仰上から無つたら、何うしても茲は「之れ程いふに分らぬなら貴様勝手にせ」と出んならぬ處だに、夫れ程言はれても彌々哀れみを加え「そんなことは貴様言ふもので無い、如何なる者でも捨てられぬ廣大のお慈悲故、今迄聞かんだなど、そんな事に目をつけず、何うか遣る瀬無き思召を聞いて呉れ」と言つて呉れる。其の夫れ程迄に言つて呉る、向ふの言葉の下に「そんなに迄自分の爲めに思つて呉る、友の親切であつたか、長々遁げ廻はつて濟まなかつた」と、其の一念に頂くお慈悲なれば、即ち三阪の親切は、遁る者を飽く迄追ひつめ放し給はぬ攝取不捨の姿である」と申し、手紙の序に何氣なく種々に善巧方便のこゝろを

聞かせたやゝにてさまゝにすかしたのみし友の眞心。

攝取不捨のこゝろを

るには「自分も此の年になり、今迄何か六かしいこと聞いて信ずること、思つたが、六かしいことを聞いたとて到底分るものぢや無い。もう自分に於ては三阪の言つて呉れたが佛直さくの仰せと頂き安んずるより外は無い」と言つて喜んで下された。私も「今迄あなたが何か珍らしきことがあらうと思はれた、其の珍らしきといふが外で無い、此の向ふより飽く迄愛相つかさず親切に言つて下さる其の向ふの思召一つである」と申し、夫れから思ひ合はすと、法然聖人の御時、時人が皆な「熊谷直實や津の戸の三郎は坂東の荒武者で、目に一文字の學問が無いから、聖人は唯念佛とお諭しなされたのである、若し學問があれば學問の事も仰せられるに違はぬも、無學の野武士故唯念佛と言はれたのである」と取沙汰した。其の時聖人が津の戸の三郎に下された手紙の一節に

熊谷入道、津の戸の三郎は無智者なればこそ、但念佛をば勧めたれ、有智の人には必しも念佛には限るべからずと申す由、きこえて候らん。さほめたる僻事にて候。其故は念佛の行は、本より有智無智に限らず、彌陀の昔し誓ひ給ひし本願も、普く一切衆生の爲也。無智の爲には念佛を願ひ有智の爲には餘の深き行を願ひ給ふ事無し。十方衆生の句に、廣く有智無智、有罪無罪、善人悪人、持戒破戒、賢愚男女、若くは佛の在世の衆生、若くは佛の滅後の此比の衆生若くは釋迦の末法萬年の後三寶皆な失ての終りの衆生迄も皆籠れるなり。(中略)廣き彌陀の本願を憑み、普く善導の進めをひろめん者、いかてか無智の人に限りて、有智の人を

へだてんや。若然らば彌陀の本願にも背き、善導の御心にも叶べからず。されば此邊にまふてきて、往生の道を問尋ね候人には、有智無智を論ぜず、皆な念佛の行計を申候也。云云といふ御教化がある。今翁が三阪に言うて呉れたが、佛が夫れ程迄に遣る瀬無く思召し下されてある御心であつたと腹一杯頂くと、もう外の六かしい事知る要も無いと言はれたが、實に茲であると一入有難く感ぜさせて頂いたことであつたのであります。

以上は長くなつたが、之が即ち掌を反したやうに満足されるといふ味ひにつき申したのである。猶ほ茲は深く言うとは何れ丈けても深き味ひのある處なれども、時間なき故、次に

「大にこれ易きが故に、凡淺の衆生多く疑惑を生ぜん。即ち大本に易往而無人と云へり。故に知ぬ難信なり」と。

即ち斯く掌を反したやうに、一遍に容易に凡夫の立場を引覆さるゝ廣大の恵みなるが故に、却つて愚の衆生は之を信ぜず疑惑の心を抱くやうになる。即ち彌陀經に十方諸佛が皆な等しく此のお慈悲を證據だて、下さるといふは茲である。故に、即ち「大經」には「易往而無人と云へり」最も容易の本願なれども得る者少いとあるはこの故である。故に知ぬ難信なりと。そこで斯く信じ難いは、即ち凡夫の思議を絶する廣大の恵みであるからにて、即ち難信は不可思議と言ふと同じ味ひであるのである。即ち斯る者をお見捨てないとは、何たる不可思議難信の仰せであるかと、斯く其儘廣大なお慈悲を仰ぐ言葉になる處が、聖人のお知らせ下さる眞宗に限る味

を得ぬやうになる。すると「臨終惡相なれども」……臨終惡相は前に言ふ如く、下に割註ありて「即ち『觀經』の下品中生に地獄の猛火一時に俱に至る等」が之であるとしてある。具縛の凡愚は、即ち「二或全く在るが故に」具て縛ある。二惑は見惑修惑として、私共の諸の煩惱惑業である。屠沽は下の割註に、「屠は謂はく、殺を宰るとありて、即ちものゝ生命を屠るのである。牛をほふり、魚をほふる即ち殺を業とする諸の獵師を言ふ。「沽は即ち醜賣」とありて、諸の商賣である。中にも字義よりいふ時は醜賣は醜は酒を醇すといふ文字にて、酒を造つて賣ることである。どちらかと言へば、同じ商賣の中ても罪深き方である。斯の如き惡人止十念に由つて、便ち超往を得、豈難信に非ずや」斯の如き惡人が頂く一念に掌を反した如く忽ち超越する成佛の法である。故に豈是れ難信不可思議の意外なる教法でないかと。猶ほ斯く話しながら思ひ出すと、「唯信鈔文意」に、初席來の法昭禪師の「能令瓦礫變成金」の文の聖人の御釋がありて、夫れが丁度茲の處に當るのである。夫れを拜讀すると

但使廻心多念佛といふは但使廻心はひとへに廻心せしめよといふことばなり。廻心といふは、自力の心をひるがへしてすつるをいふなり。實報土にむまるゝひととは、かならず無碍光佛の心中におさめとりたまふゆへに、金剛の信心となるなり。この故に多念佛とまふす。多は大の心なり、勝の心なり、増上のこゝろなり。大はおほきなり、勝はすぐれたり、よろづの善にまされりとしるべし。増上はよろづの善にすぐれたるなり。これすなはち他力本願のゆへな

はひなのであります。

七 聞持記に云はく

次は「聞持記」になりて
聞持記云。不簡愚智性有不擇豪賤強弱不論久近
功有淺深不選善惡好醜取決誓猛信臨終惡相即觀經下
獄衆火一具縛凡愚在故屠沽下類刹那超越成佛
時俱至等
法可謂一切世聞甚難信也屠謂宰殺沽即醜賣
得超往阿彌陀如來號眞實明平等覺難思議畢
豈非難信
竟依大應供大安慰無等等不可思議光已上

これは前席の元照律師の「彌陀經義疏」の文を、更に註釋したのが「聞持記」である。即ち大字の處は元照律師の文其儘で、割註の處丈けが「聞持記」の文なのである。讀むと「性に利鈍有り、報に強弱有り、功に淺深有り、行に好醜有り」即ち衆生の機類に種々様々ある。即ち性來利根の者もあれば鈍根もあり、強きあれば弱き者もあり。比較的善が出来るものあれば出来ぬあり。好さもあれば醜さあり、千差萬別であるが「決誓猛信を取れば」決誓猛信は最後に、「よくも」斯る者を斯程迄の廣大の思召とは」と、初めて廣大の思召に夜が明けた處が、決誓猛信である。自分の方から決誓猛信になること、思うたら大變な間違ひである。向ふの飽く迄お見捨て無き若不生者のお心が届くから、謝り果て、決誓猛信ならざる

り。自力のこゝろをすつといふは、やう／＼さま／＼の大
小の聖人、善惡の凡夫の、みづから身をよしとちもふこゝろをすて、身をたのみず、あしきこゝろをさかしくかへりみず、またひとをあしよしとちもふこゝろをすて、ひとすぢに具縛の凡夫、屠沽の下類、無碍光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。具縛といふはよろづの煩惱にしばられたるわれらなり。煩は身をわづらはす、惱はこゝろをなやますといふ。屠はよろづのいきたるものをころしほふるもの、これは獵師といふものなり。沽はよろづのものをうりかふものなり。これはあきなひとなり。これらを下類といふなり。かやうのあしきひと、獵さま／＼のものは、みないしかはらつてのごとくなるわれらなり。能令瓦礫變成金といふは、能はよくといふ。令はせしむといふ。瓦はかはらといふ。礫はつぶてといふ。變成金は變成はかへなすといふ。金はこがねといふ。如來の本願を信ずれば、かはらつぶてのごとくなるわれらも、こがねにかへなさしむとたとへたまへるなり。あきひと獵師などは、いしかはらつてのごとくなるを、如來攝取のひかりにおさめとりたまひてすてたまはず。これひとへにまことの信心のゆへなればなりとしるべし。攝取のひかりとまをすは、無碍光佛の御こゝろのうち、おさめとりたまふゆへに、金剛の信心とまふすなり。文のこゝろはおもふほどはまうしあらはしさらはねども、あら／＼まふすなり。ふかきことは、よからんひとにもとせたまふべし。云々。

實に有難き御教化にして、私など現に最後は、石、瓦、土塊と、自ら變はらぬ身の上と感ずるやうになつて仕舞うた。處が其の哀はれなる者の心中を飽迄知り抜き、察し、其の者を最後迄お見捨てなき仰せと、彌々知らして貰つた一念に、不思議なる哉、今迄の人が呆れ果てる瓦礫の悪しきが、夫れに呆れぬ慈悲の爲めに溶され、忽ち功德の水に轉じ變はつて仕舞ふたのである。實に是れ屠沽の下類、一念に超越する廣大の御哀はれみである。

八 不可思議光佛

處で次に一つの珍らしき御文があります。即ち『阿彌陀如來は眞實明、平等覺、難思議、畢竟依、大應供、大安慰、無等々、不可思議光と號したてまつる』こは『聞持記』には無きお言葉にして、之れ丈けは聖人が態々茲にお書き添へなされたものなのである。何うかといふに先きにも言ふ如く、斯く難信々々とするは、唯難信といふ丈けのことでは無くて、即ち夫れ程廣大なる、お見捨て無き、不可思議難信の遣る瀬無き御愛憐にてまします、といふ聖人御喜びである。故に其の難信の意味は此の不可思議の佛である此の難思議のお慈悲である、といふことを言ふ爲めに、態々曇鸞大師の『讚阿彌陀佛偈』の三十二の佛名中、九名を茲に持つて来て、お挙げ下されたものなのである。初めに佛名を眞實明といふといふは、即ち我々の不實の暗黒を捨てぬ佛の眞實の明な御まこと故、眞實明である。又平等覺は、我々が有無の二見に係はつてあゝ斯う言うて居る、夫れをお見捨

て無きお哀れみ故平等覺であります。茲は『和讃』に智慧の光明はかりなし、有量の諸相ことごとく、光曉かふらぬものはなし、眞實明に歸命せよ。解脱の光輪さほもなし、光觸かふるものはみな、有無をはなるとのべたまふ、平等覺に歸命せよ。又次ぎに難思議は、一切の有碍にさはりなし、光澤かふらぬものぞなき、難思議を歸命せよ。即ち人生には有りと有る碍りがあつて、或は互に人を隔て、悪しき思ひを燃やして居る。即ち人生は有碍と有碍との集りであるに、佛のお照らしは光澤無碍虚空の如くにして、一切の有碍に障りが無い。即ち不思議なる哉其の有碍が哀はれと飽く迄佛の方より無碍にして下さる廣大なるお慈悲である爲めに、遂に如何なる有碍の者も光澤からぬは無くなりて、其の有様は到底人間の思慮の絶えたる難思議である。又清淨光明ならびなし、遇斯光のゆへなれば、一切の業繫ものぞこりぬ、畢竟依を歸命せよ。ひと度び清らかなお光に遇ふと、我々如何に業報の繫縛はあるも、夫れを見捨てぬとある難有きお慈悲の爲めに、夫れが皆な忽ち融かされ、茲に初めて人生の夜が明ける。故に結局此のお見捨てなき仰せ一つが人生の畢竟依と、窮極する所人生の據所は此の廣大の御哀れみの外に無い。又次ぎの大應供は、

佛光照曜最第一、
三塗の黒闇ひらくなり、
光炎王佛となづけたり、
大應供を歸命せよ。

即ち佛の廣大なる徳益は、有りとある三塗の黒闇を照らし開いて下さる慈悲の光明である。故に即ち佛は大應供、應供は、梵語で所謂阿羅漢の義であります。又慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ。有りとある者を照らし、光の到る所、總べての惱める者苦しめる者には法喜を興へて下さるお慈悲故、即ち佛は大安慰である。

光明月日に勝過して、
超日月光となづけたり、
釋迦嘆じてなをつきず、
無等々を歸命せよ。
其の光益の有難きことは、日月の光にも勝過して、到底世の何物にも並べて言へぬ廣大なる御不思議故、即ち無等々である。又

信心歡喜慶所聞、
乃暨一念至心者、
南無不可思議光佛、
頭面に禮したてまつれ。
信心歡喜して乃至一念遣る瀬無き思召を頂くなり、無量無邊不可思議の廣大なる功德は行者の身に充ち満ちて下され、其の味ひは唯もう不可思議のお恵みよと、中心より満足させられ仰ぎ喜ぶより外無い。其の廣大なる佛故、即ち南無不可思議光佛と號し奉ると、即ち是れ皆な絶大なる佛徳を擧げさせられ、到底凡慮に非る難信不可思議の横超本願たる趣きを知らせ下さるに外ならぬのであります。

九 自障自蔽

さて最後が『樂邦文類』になりて、之に力を入るゝ積りであつ

たのでありますけれども、時間がなくなつて仕舞うた。樂邦文類後序曰。修淨土者常多得其門而徑造者無幾。論淨土者常多得其要而直指者或寡矣。曾未聞有以自障自蔽爲說者。因得以言之。夫自障莫若愛、自蔽莫若疑。但使疑愛二心了無障礙、則淨土一門未始間隔。彌陀洪願常自攝持、必然之理也。已上、此の他力淨土の教を喜んで、口に念佛を修し、お慈悲を言ふ者は數有るけれども、眞に信を得、眞に廣大の恵みを頂いて、即ち眞に其の門を得て、徑に廣大の思召に到る者は幾何も無い。又口に淨土を論じ、お慈悲々々と言ふ者は有るけれども、多くは私雜りの説であつて、眞に其要を得て指ふる者は寡い。茲に指の字を「をしふる」とあるは、「我能く汝を護らん」と、佛の方より私を指し、私を押えての仰せを、私に直き／＼言うて下されたが、法然聖人の御教化である。然るに其の眞の智識のお意を、眞に自心に得て言ふ者に至りては甚だ少い。「曾て未だ聞かず、自障自蔽を以て説をなすこと有る者を」茲は言ひ廻はしが六かしけれども、自障は即ち自ら障へ自蔽は自ら蔽ふである。即ち一言に言ふと世間の多くは皆な自障自蔽で、眞にお慈悲頂いて喜んで居る者は至極少ないのである。「得るに因つて以て之を言ふ」とは、之は何うでも讀めるなれども今「自分は眞に之を得るに由りて、之を言ふ」との意味に頂くと一番有難い。即ち『阿彌陀經』に、

たのでありますけれども、時間がなくなつて仕舞うた。樂邦文類後序曰。修淨土者常多得其門而徑造者無幾。論淨土者常多得其要而直指者或寡矣。曾未聞有以自障自蔽爲說者。因得以言之。夫自障莫若愛、自蔽莫若疑。但使疑愛二心了無障礙、則淨土一門未始間隔。彌陀洪願常自攝持、必然之理也。已上、此の他力淨土の教を喜んで、口に念佛を修し、お慈悲を言ふ者は數有るけれども、眞に信を得、眞に廣大の恵みを頂いて、即ち眞に其の門を得て、徑に廣大の思召に到る者は幾何も無い。又口に淨土を論じ、お慈悲々々と言ふ者は有るけれども、多くは私雜りの説であつて、眞に其要を得て指ふる者は寡い。茲に指の字を「をしふる」とあるは、「我能く汝を護らん」と、佛の方より私を指し、私を押えての仰せを、私に直き／＼言うて下されたが、法然聖人の御教化である。然るに其の眞の智識のお意を、眞に自心に得て言ふ者に至りては甚だ少い。「曾て未だ聞かず、自障自蔽を以て説をなすこと有る者を」茲は言ひ廻はしが六かしけれども、自障は即ち自ら障へ自蔽は自ら蔽ふである。即ち一言に言ふと世間の多くは皆な自障自蔽で、眞にお慈悲頂いて喜んで居る者は至極少ないのである。「得るに因つて以て之を言ふ」とは、之は何うでも讀めるなれども今「自分は眞に之を得るに由りて、之を言ふ」との意味に頂くと一番有難い。即ち『阿彌陀經』に、

舍利弗、我是の利を見るが故に、此の言を説く。と仰せられると同じで「世間の皆んなが自障自蔽に止つてはならぬ、なせ然う言ふか」といふに、今自分は佛の廣大なる慈悲を頂き、其の味ひを知つて居るから言ふのである」と此のお意に頂くのであります。次に「夫れ自障は愛に若くは無し」皆んなが自ら障へて居る病根は、第一愛に若くは無し。即ち皆んなが第一貪愛恩愛の念に障へられて居るとである。又「自蔽は疑に若くは莫し」一切を疑うてかゝる疑ひの性分のため、に皆んなが蔽はれて居る。然るに今この他力の廣大なお恵みは、「但疑愛の二心をして丁に障礙無からしむるは、即ち淨土の一門なり」此の疑愛の自障自蔽をして障礙無からしむるものは此の横超他力の恵みであるとしてある。即ち疑愛が先きに立てば、自障自蔽して助からぬが當然であるに、今廣大のお恵みは其の自障自蔽が哀はれなばかりに飽く迄無愛無疑の心で現はれ下された廣大の眞實である爲に、之に遇へば如何なる疑愛も障礙無からしめて下さるが此の他力淨土のお慈悲であるとしてある。茲味ひの存する所なのであります。

一〇 疑ひは必ず晴れる

之につき前年私は大にびつくりしたことがある。前年美濃の高須で話した時に、或人あつて何うしても疑ひの心が取れるとよい〜で、何うしても安心のゆかぬ人があつた。併し夫れでも其者を佛の方よりは飽く迄〜疑はず、何處迄も眞實に向うて下さるお慈悲である」と、飽く迄〜話したら、とうと始めて疑ひが取れ、今迄疑情を取り度いななど實にす

のお言葉から言うても我々淨土を論ずる者は澤山あるけれども、眞に其の要を得て言ふ者に至りては少い。曾つて未だ聞かず自障自蔽を以て説を爲すことある者を——即ち極言すれば、皆んな疑ひながら説を爲して居るから、眞實の安心が出て來ぬとの仰せなのである。即ち疑ひが全く取れた味ひの上から、始めて言はるべき言葉であるのである。自障自蔽の疑愛は我々初めから無いのぢや無い、大に在る。在ることは在るも其の在る爲めに彌々其の者を障礙無からしめんと、飽く迄廣大の眞實に向はせらるゝお慈悲である爲めに、遂に其の思召が徹到する一念に、その有りとある障礙を消し、融かしてまうて下さる處が實に有難いのである。茲は是非はつきり聞いとて頂かねばならぬのであります。

一一 未だ始めより間隔せず

猶ほ私は此時茲の文を読み、非常に驚いたは、此の次ぎの「未だ始めより間隔せず」の一句であつたのである。間隔は即ち人を疎んじ隔てるである。御存知の如く私は、隔て心で苦しんで頂いたの故、佛の方よりは未だ曾つて私を隔て、下さらぬとのお言葉が、殊に身に泌みて有難かつたのである。意味は我々此方の方の隔て、疑ひ、自ら局分し、又いつ角自分が出來る積りで自らを頼み、佛の折角の御心配を無視して居るのであるけれども、佛の方は更に私を隔て給はず、我々罪深き者の爲に、始めより飽く迄其者の親であるとして自ら任じ、益々愛憐の涙を注いで下さる廣大の御眞實でまします、とてあります。「始めより」は「和讃奥書の文」に

まぬ考えてあつたと、非常に喜んで下された方があつた。すると傍に居られた或る僧侶の方が夫を見て居て、「先生、まことに有難うございます、疑ひは何うしても取れぬと仰しやる、あすこが有難うございます」と言はれる。私はびつくりして「私はその言やせぬが」と言うけれども何うして分らぬ。段々押して聞くと、其の方の頭には「疑ひながらの往生、難行ありながらの往生」といふ考が前から這入つて居つたのである。其時茲の文を向ふから出し、「茲に斯うあるから疑ひながらの往生と頂いて居る」と言はれ、私は大に驚いたことがあつたのであります。で私は其方に「いや此方が其の疑うてかゝる私である爲めに、彌々向うは大悲の思ひ遣る瀬無く、飽く迄眞實に向うて下さるお慈悲なのである。此方が斯く自障自蔽で何うしても出られぬ様が可哀相で捨て置けぬから、其の者に飽く迄向ふより疑はず、廣大の同情を以て向うて下さる御親切でましますのである。で斯くの如き廣大の御親切であるために、遂に如何なしぶと私も、最後に自分の今迄の疑ひ悪しきの申譯けなきことを自覺し、今迄の疑ひの雲頓に消散して、即ち頂くといふは茲のことである」と申し、夫れから「教行信證」總序の

難信金剛の信樂は、疑を除き證を獲しむる眞理なり。の文を引いてお話した。即ち斯く明に「疑を除く」と仰しやつてお出で下さるのである。然るに今の方は何か今の文を、疑ひながらの往生と言はれたと取られたらしきも、茲の文の肝要は、其の疑愛を障礙無からしむるお慈悲の爲めに、遂に私の疑愛が融け、取れる處が有難いのである。こは今の初め

かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて彌陀佛とはさくならひてさふらふ。

阿彌陀佛とは始めより、私を捨てぬ思召一つより、一念一刹那も私を隔て、下さらぬお姿が、阿彌陀佛にてましますのである。「彌陀の洪願常に自から攝持したまふこと必然の理也」之は又今の「和讃奥書」の文に

自然といふは自はおのづからいふ。行者のはからひにあらざ、しからしむといふことばなり。然といふはしからしむといふことは行者のはからひにあらざ、如來のちかひにてあるがゆへに。法爾といふは如來の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふ。云々。

即ち斯く飽く迄お見捨て無き洪大なる御誓ひにてまします故其の廣大なる願力にて御引接を蒙り、其の光明中に攝取護持の仕合せを蒙るは、自然法爾、おのづから願力の必然の理であるのである。又法然聖人の御法語には

法爾道理と云ふ事あり。炎は空に登り、水は下りさまに流る。菓子の中に、すき物あり、甘き物あり。此等は皆な法爾の道理也。阿彌陀佛の本願は、名號を以て罪惡の衆生を導んと誓ひ給ひたれば、只一向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にて備はるべき也。(和語灯録)

水は下りさまに流れ、雲は高き上に上る。今罪惡深重の石、瓦の塊が金になる筈は無けれども、其の石瓦を捨てぬ偉大なる願力の火で遣る瀬なく向はるゝもの故、必ず煩惱の水とけ、即ち功德の水となる。之は即ち廣大なる願力による自然必然の理であるのである。又「和讃」には

告白

さぞ悲しからう尤ぢや

徳田 潔

信は願より生ずれば、
 自然はすなはち報土なり、
 私共廣大なる慈悲を頂くは、向ふさまに於て頂かせやう
 と實に長々の間の御苦勞であるのである。即ち先きの三
 阪翁の長々の友情にて、「あゝよく言つて呉れた」と一念氣が
 つけば、其の儘が廣大なる信樂の味ひである如く、信は其の
 長々の間の佛の願より生ずれば、南無阿彌陀佛々々々と念佛
 稱え、遂に淨土に往生して佛に成らせて頂くも、其の佛願力
 の故の自然の味ひである。而して「自然はすなはち報土なり證
 大涅槃うたがはず」其の佛願力自然の味ひが、又其の儘廣
 大の淨土の有様であつて、又之が實に聖人の告知らせ下さる
 念佛成佛是眞宗の姿であるのである。「和讃」に
 念佛成佛これ眞宗、
 萬行諸善これ假門、
 權實眞假をわかずして、
 聖の權化の方便に、
 諸有に流轉の身とぞなる、
 悲願の一乘歸命せよ。
 とあるが、即ち之なのであります。(已上第三回求道會第二日第二席)



私がこれまで人生問題について苦しんだ事は、今こゝにく
 ど／＼しく申上切れませぬから略しますが、現代青年諸君の
 御經驗を代表すべきものであります。死の問題、家庭問題、修
 養問題、經濟問題、交際問題、教育問題等、眞面目なる人生
 を送らんとせざるだけ、それだけ種々求めました。「求めたりま
 れど與へられず」の感は十數年間でありました。従つて儒に、
 佛に、神に、彼に行きこれに行き、恰も不治病人の醫藥、さ
 ては加持祈禱に迷へるその如くでありました。がこの九年
 間最も私の人生問題解決の指針としてたよりにせしは、恩
 寵主義の如來の說明でありました。此の思想で私の中心内
 閣を造りあげて、之を以て信仰だとして居りました。而して
 佛教、殊に他力信仰も、この説き方ならずんば以て現代青年
 の求道心を満足せしむべからず。これ明治に於ける新佛教な
 りとして、彼の念佛して彌陀にたすけられまゐらせて往生を
 ばとぐる云々の説法の如きはなぞと、大それた考で、實は
 近角師などはてんで眼中になかつたのであります。又或一派
 の他宗の人々より、先生の悪口など聞かされては、先生の著
 書など見むきもせませんでした。それが近來私の職務教育上

の問題が理想的に行かず、社會の紊亂を悲觀し、之を己に求
 むるの結果、大に人格修養の問題を切實に感じ、或る人の勸
 誘に依り基督教の研究をはじめしに、それが爲め種々の家庭
 問題を起し、爲に之を中止し、こゝに再び佛教に立歸り、や
 はり信仰建設(今より思へば)に汲々として居りました。勿論
 談話も聞き、他の哲學問題心理問題をも加味し、基督教、神道、
 儒教の共通をとり、之が普通の宗教だ、文明宗教だとして、
 祈禱もし念佛もするといふ時代もありましたが、後には専ら
 佛教に傾倒し、祈禱も遠のき、聖書も怠り、只念佛を唱ふる
 事になりました。妻は眞宗生れなれども眞の信仰はなく、人生
 問題に日々苦んで居るのがなさけなくあはれに、實は我身も
 同様なれども、自分は如來の恩寵に懺悔し感謝し、現在安住
 して奮闘の生活をなす者と自得しては居りました。けれども
 しかし妻に心服せられぬ處、人を感化せしめ得ぬ處より、眞に
 自分の信仰なるものが果して如何との疑念は、心の奥底にさ
 やくを禁じ得ませんでした。その内近角先生來縣の事を聞
 き、遂に聴聞に行く氣になりました。五日間にはきつと信仰
 を得て歸りたきものと、大なる希望を以て出發しました。聽
 講の第一日は、吾人の罪惡觀無常觀無力觀と、彌陀の慈悲と
 を午前、午後は御示談にて、夜は十二時まで聞かせて貰
 ひましたが、結局御慈悲の御話耳には聞えるけれども、ど
 うしても心に聞えぬ。佛とは何ぞや、信仰を得ば以て人格の
 向上も出來べきか、教育上其効果は如何、日常生活に影響如
 何といふやうな事に眼がついてどうしても、それが分つたら
 信じられせうと、そこにひつかつて不安の中に其夜を眠

につきました。
 第二日午前の御講話の時に、現代青年の信仰界の傾向を説
 かれる際、その信仰界の動亂の根本問題について、所謂恩寵
 主義積極主義の、説明を以て構成せる思想なるが故に、きつ
 と人生問題にぶつつかると崩るゝの無理からぬ事を聞き、今
 まて私の本據として居つたその城が崩れたと聞いては、今は
 全く孤城落日の感、もう念佛もとなへたくなく落膽失望眞に
 悲觀の極に達しました。同日午後の御示談に於ても益々崩さ
 れましたが、夜の座に於て、他の人の御教化中チョット何か
 私の心にひびいた様でしたが、これが信仰の得られたのでは
 あらうかと、多少の希望をいだいて寝につきました。
 第三日、今日は選擇願心の御講話、會場に於て先づ第一日
 來の、人生↓信仰、信仰↓人生について復演、且つ夜來座
 談に行きつまれる或一人について御教化を虚心平氣聽聞して
 居りました處が、先日來の肝心かなめの點をくりかへし、種
 々の卑近の例をひいての御話、要點も言葉も同じ事をくりか
 へされるのにならなかつたが、「嘗て九州に行つた時、
 已に出發間際になつて山口縣より遙々來會せし一婦人、いろ
 ／＼問どろい事いうて居るから、「あなたまだそんな間ぬるい
 事云うて居りますか、今私は立つて行くのですよ。遙々こゝ
 へさして來て、愈々時間は切迫安心は得られず、あれだけ聞
 かせて貰うても聞えぬとは、さて／＼あなた自分の心はなさ
 けなく、淺間敷くは思ひませぬか」と問ひかくれば、「いやはや
 何とも仕様仕方のないこの私。とても御助けにはあづかれま
 せぬ、悲しや残念や」その悲しい淺ましいあなたの心を、さ

ぞ悲しからう、淺ましからう尤もじゃ、そこを吾かねて承知してどこ／＼までも察してやるぞ見捨てはせぬぞと、やるせなく云うてくださる御慈悲ではないか云々』(恰も私共と同じき状態故、吾身の上にひし／＼と聞えて居りましたが)こゝに至つて「さてはさうであつたか、それほどまでにやるせなき廣大な不思議の御慈悲か、にげまはるこの私をどこ／＼までも御つきまとひ下さるか、それを今が今までしかも先日來幾度となくおつしやつて下されたのを——合點が出来なかつたとは、さても／＼もつたいなやありがたやと、總身發汗淋漓、落涙滂沱、御稱名やら號泣の聲やら、場所も人目もあらばこそ、あゝ私は心からこんなに泣いた事は生來實に始めてです。さういふ廣大な御慈悲が私の心にはじめてといたのです。こんな大慈大悲のある以上、もはや何もなくても、どんなに艱難苦勞が來ましても、世間が皆鬼であらうとも、たとへ地獄に落ちたりとも、決して不足はありませんと——私の今までの不實の心は御慈悲の御眞實にどこへやら陰も形もないやうになりました。

无碍光の利益より、威徳廣大の信を得て、必ず煩惱の水とけ、即ち菩提の水となる。とはこの事かと存じます。罪障多き悪人こそ尙さらかはいそふなどの御慈悲、げに永く苦しんだだけ難有味も一層深いのであります。

罪障功徳の體となる、水と水のことくにて、水多きに水多し、障多きに徳多し。といふこともなるほどと受取れました。

知り抜きて見捨てぬぞとの御一言

葛西 吉彌

先づ私の生ひ立ちから申上げませう。愚生の故郷は青森縣北津輕郡中里村大字宮之澤と云ふ、ごく僻村でありまして、生家は寺院所てなく農家であります。そして又眞宗でなく淨土宗でありますが、愚生の祖父も兩親も、よく寺院に參詣する人でありまして、愚生も四五歳の時より母の脊におはれて參詣致し、説教なども始終聞いたのであります。夫れから段々物事が分るやうになりてからは、何となく高僧の御傳記など聞くことがすきになり、殊に法然聖人の御傳記など、非常に好きにて、長ずるに及び益々宗教の演説説教等に心が走り、終に十四歳の時、中里村眞宗寺院眞勝寺といふ寺院にて、住職より淨土三部妙典の拜讀を教はり、少なき黒衣黒袈裟を着服して、僧侶とさして頂いたのであります。併し當時の宗教に對しての考は、唯「宗教は非常に強い感動を持つて居る、」佛敎は無常の有様を著しく現はして、常住の光を強く示して居る」古の宗教家は偉大なる人格者であつた、徳行者であつた」又甚だ生意氣なことを言うやうであります。當時私は慊慨することが非常に好きでして、「何ぞ此の如き有難き佛敎が衰微するのであらうか、何うして偉大なる宗教家が今日出現せぬのであらうか、社會に宗教心が無いのであらうか、僧侶に信仰が無いのであらうか」と、このやうなことばかりを

佛とは何ぞや、信仰の境地如何、そんな問題に没頭しては到底御慈悲は聞えぬのであつた。それは西へ行くべきを東へ行くのである。先生は信後の有様や御救ひの状況をどうしても話されぬ。けれどもそれが先づ聞きたくて聞きたくてならなかつた。それを聞いて果して信仰の價値あるといふ事が分つたら信じ易からうにと思つたが、それを申されぬのでいろ／＼苦しむと思つて居たが、それを聞かされぬからでなくてそれを聞いたらいふ根性にさへられて御慈悲が聞えぬのであつた。世間問題であるならば、先づ算用して置いて、それから理をとりに行くべきであらうが、そんな優長な問題ではないのであつた。又分つた様な心持にならうとつとめてもそれはだめであつた。それこそ自力で造るのである。なるほど他力でなければいけぬ事も分つた。その自力の信心は信を得た上からはよく眞僞が見えるのである。先生がよく人の心の中を洞見せらるゝ事もなるほどと合點せられる。

畢竟信仰とは御親切が私の心に聞える事であつた。一度まことが聞えた以上は、もう人が何といはうがぶらつさもせねば疑もない。人様の御信心を聞いて見ると、いろ／＼言葉の上の御信心、器械的安心、即ち自力の安心らしいのがあるらしい。又或人は人の安心の状態と比較して見れば承知のならばぬ人もあるらしいが、そんなものではないのである。こゝは自己の實驗であるから、人に問ふも何も無い、我が心中の問題であると思ふ。人生問題もどこへやら始末がついた様である。今までは信心求めたさのあづり念佛であつたが、今度は感謝の御稱名である。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

考へ泣き崩れた事も度び／＼あつたのであります。殊に愚生の故郷は佛敎盛ならず就中眞宗は殊に振はず、之が愚生の悲歎の種でありました。今より考へて見ますれば、實に自分が高上り仕て居たので、あゝ勿體ないことである。南無阿彌陀佛。後に至つて自分が進退極まり、大苦悶に陥入るといふことも、當時に於ては更に思はなかつたのであります。それから私が、先生がお出でになることを、始めて知らしめて頂いたのも、丁度此の頃であつたのであります。當時私は先生の御演説の概要を筆記した「實驗的宗教」といふ小冊子を拜讀して頂いたのであります。其の概要は、佛説箭輪經の毒矢の譬喩、現今青年の求道の態度などを懇切に説かれ、實に有難いことばかしてあつたのであります。其の時思ひますには、近角先生とは實に偉大なる宗教家である、熱烈なる信仰家であると、深く敬慕の念を起したのである。實に親鸞聖人が、佛滅以來の偉大なるお方であることを、眞に知らして頂いたのは、一に先生の御蔭によるのであります。又或時先生の御執筆にかゝる、御遠忌紀念の發行「宗祖觀」といふ書冊の中に「親鸞聖人の眞實相」といふ一文を讀み、今迄何だか眞宗に於ては一方には悪人救済を強く説き一方にては「定めおかせらるゝ御掟一期をかぎり守り申す可く候」何んだか今迄蓮如上人の思召を一方に強く悪人救済のお慈悲と説かれ、一方に引きかへして行を守つて行かなくてはならぬ、といふ風に説く在來の解釋が、何うも私の胸に落ちなかつた。處が「眞實相」の一篇で夫れを非常に明かに頂かせて頂いたのであります。それから益々先生を追慕する念が強くなつて參

りました。

それから其後私は或る動機で上京することとなり、兄の許に参りました。愚生の兄と云ふのは非常な宗教反對で、殊に眞宗を悲觀的とか、活氣が無いとか、つまり弱者の慰めだとか申し、斯くの如き宗教は、現今の理性一方の社會では更に活力が無いとか、始終言うて聞かれました。其の時から私は漸く考が變はり、今迄閑靜な質朴な田舎に在つたのが、急に繁劇な東京に出たのでありますから、種々なる四邊の事情にかられ、終に勿體なくも今迄持續して來た信仰を失ひ、兄のいふつまり弱者に誘はれて、悲觀してはならぬ、彼の「ニイチエ」の如く、人は力である、強くなれよ、倒れる迄進め、斷じて行へば鬼神も之を避く、この如き勇氣でやれ、そして常に「胸中閑日月あり」の風情でなければならぬ、常識を尊べ、智を崇めよ、克己を充實せしめよ、成功せん位なら死んだ方がよい、人間と生れた以上は「シイザ」の如くやれ、「ナポレオン」の如くやれ、太閤の如くあれ、男子は決して涙を落してはならぬ、痛苦を恐れるな、逆境を楽しめよ、成功の手段には何事でもやれ、又或時は宗教を信じて、大に理想的活動の標本となれ、といふ風であつたのであります。實に勿體至極もない事を思ふたのであります。斯くの如き野暴心から、私は今迄兩親の膝下で我儘一杯に働いて居たのが、俄に印刷會社へ奉公に這入るなどして、炎熱中狭き工場で汗だらけて働き、身體が痛くて働かれぬ程の過激な勞働をやり、或時は會社に商店につとめて種々の實務を見習ひ、兩親の世話は決して受けぬ、獨立獨行にて何處迄もやるといふ風であつたのであります。

ます。兩親はひどく之を心配して呉れて、歸國するか、又は學資を送るから學校に入學せよと、種々にすゝめて呉れたのでありますけれど、私は更に聞きませぬ。皆ん並みのやり方で成功するなら、眞の強者で無いと、飽く迄兩親の慈愛を入れなかつたのであります。然るに斯く極端なことをやりつゝある中に、私は僅か數年にして遂に倒れたのであります。私は病氣の爲め非常な苦悶に陥入り、今迄の勞苦をすつかり水泡にして、空しく無念の涙を吞みつゝ、故郷に歸ることになつたのであります。歸る途中盛岡邊で、紅葉を呈せる岩手山を臨み、涼風面を拂ふ淋しい秋の景色を眺めた時の私の失望、私は自殺でも仕兼ねない程に思ひました。斯の如き有様でありましたから、私は在京中も九段俱樂部で先生の御講話は、僅二三回拜聴せしのみ、御縁はなかつたのであります。今思へば實に残念に存じます。

斯くして私は故郷に歸りましたが、夫れでも唯々成功仕度いと計り思ふて居ります。爾るに身體の方は益々夫れから衰弱し、非常に悲觀せねばならぬやうになつて参りました。さういふ有様ですから、何一つ行ふことは出来ず、近郷の寺院でぶら／＼遊んで居る中に、或る知己の僧侶より、急に北海道開拓地の寺院に留守居を懇請され、已を得ず行くことになりました。其處に参つてからも、唯々精神上苦しさ生活を續けて居りましたが、益々身體は衰弱して苦しくなり、如何程成功仕度いとあせつても、今はひどく意氣が衰へ、元氣がつかず、彌々悲痛働哭が重り、度び／＼落莫たる北海道の山野を眺め、苦悶の吐息をついたのであります。そしてる中に

私は、丁度昨年の新年を迎へることになりました。其の時思ふには、二十にして立つと古聖賢は言はれたが、あゝ自分は此の状態は何んだらうと、唯々青年時代より成功せる人士の上のみ羨ましくなりませぬでした。斯くしてる中に三月四月と經ち、北海の堅氷も暖き春の溫氣に溶解され、俄に青草は生じ、今迄の枯木なす山々は、一時に滴る計りの濃緑と變じ、微妙な音樂のやうな鳥の聲、まことに言語に盡されざる陽春の候となりました。其の時思ひますには、正岡子規といふ俳人は「人間は動き出しけり春の風」と言うたが、自分は實に「人間は死に出しけり春の風」であると思ひ、其の時の苦しきは今は眞に思ひ出すことも出来ませぬ。恐れ多きことながら、先生が御苦悶當時、黒雲の中をおし分けてゆくやうであると言はれた當時と、符節を合はせた如くであつたのであります。斯くして苦悶の結果、私は今度は絶對絶命安心の道を欲しくなりました。今迄捨て、省みなかつた宗教が非常に俄に戀しくなり、佛教では安樂淨土に往生といふが、其の境界に行き度いと念が、切になりて参りました。「あゝ一刻も早く安心を得度い」と、今度は以前とは變り、苦悶の餘り夢中になつて、宗教を求めるやうになりました。今迄の智識とか常識とかの、人生にくよく／＼して居る道は、最早や五月蠅くて堪え切れなくなつて來た。此の時實に私は、精神に一大變化を來したのであります。今度は何うしても宗教により、安心をさして貰はねばならぬとなつたのであります。

併しながら宗教を求めると言つても私は非常に理想が大きくなり、偉大なる救濟深き經驗を有して、如何なる問題でも

解決し得る宗教、崇高の人格滿腔の同情のほどばしる宗教でなければならぬ、そして自分も其の域に到らねばならぬと力んだのであります。設へば楠正成の如き誠心誠意が出て來ねばならぬ、「リンコロン」の如き同情心がなければならぬ、「ルイテル」の如き大改革的意志が無ければならぬ、清澤滿之の如き精神でなければならぬ、と思ひました。それで先生御著の「親鸞聖人の信仰」を拜讀したのであります。第三章如來本願の廻向といふ處に到り、俄然大感動を起しました。が夫れはあとより思へば全く先生の思召を誤つて頂いて居つたのであります。それでも一時は氣を張つて有難がつて居つたのであります。間もなく今度は大苦悶に陥入り、今度は全くの狂氣の如くなつて先生に解決を仰いだのであります。先生は呆れ給はず、二回も長文の御親筆を下され、深く／＼御禮申上る所であります。當時の苦悶状態は、既に先生御承知下さると承はり、略すること、致します。

斯くの如くして私は先生の始終の仰せ「如來は全く自己を知り抜いて、飽く迄私を見捨て給はざるお心である」と、實に此の一言で私は蘇生さして頂いたのであります。如何なる苦悶に陥入りた時でも、私は先生の茲の御自督を頂かして貰うと、忽ち蘇生することが出来るのであります。實に此の一言は、悪人救濟の眞の大明と頂かして貰ふのであります。何れへ向うても、此の一言は正しく救濟の呼び聲であります。情々頂かして貰ひまするに、先生は御苦悶當時、眞實の友人を欲しい／＼と思つたと、何時も仰しやるが、丁度私が其の通りであつたのであります。私は實に當時、此方は隔てゝも、

飽く迄恵みをかけて下さる眞の人を得度い〜と思ひました。全く先生と寸分違はなかつたのであります。してみれば先生は忝けなくも我が身に引きかけて御苦勞なしたされたのでありましたか。申せば限りありませぬが、私は長い間今日迄種々の理想を描いて、楠公の如く、「リンコン」の如く、清澤師の如くあれと思つたのでありましたが、一步も夫れ等の境界には出づる事は出来ませぬでした。斯の如き哀れな有様でも、此の佛陀の恵みまします上は、私は更に悲む事は有りませぬ。斯くの如き安心の身とさして頂いたも、偏へに佛智不思議の然らしめ給ふ處、又親鸞聖人滿九十年の犠牲的本願弘通の御苦勞の御恩、又今日に於て偉大なる先生の御導きによること、喜ばして貰うて居ります。畏れ多き言ながら、先生と愚生とは、切つても切れぬ親密の關係である。管に現世に於てのみでなく、永劫父子の間柄で有つたのでありませうか。南無阿彌陀佛々々々。

『懺悔録』に於ては、御入信の徑路、及阿闍世王入信の章。『親鸞聖人の信仰』にては第三章。

『人生と信仰』にては世界宇宙と信仰の一章。及結文。

『信仰餘瀝』にては、詩的信仰の一章。

之等は愚生が最も喜ばせて貰うて居る處であります。

昨日も何氣なく讀むに『人生と信仰』第一章、人生問題と信仰の章に、

「苦しいといふ處から信仰に入るといふは、私のいつも言う處である」

と仰せられてある。聖人は本願にお遇ひなされ、「善知識にあ

ふことも、をしふることもまた難し、よく聞くこともかたければ、信ずることもなほかたし」と喜ひなされてあるが、實に他力本願の妙味を知らして頂いたは、全く先生の御導きによるのであります。

あゝ、私は一滴の水を求め、一點の光を求めつゝありましたに、豈計らんや後より大光明、御泉水が来たといふ味ひは、私の最も有難い處である。昨年は後よりといふ味ひは、全く思ひもよらなかつたのであります。色々つまらぬことばかり申上げますが、愚生は今迄自殺を企てる事數回に及びました。夫れが今は難思の弘誓は難度海を度する大船で今は苦しみが益々加はるにつれ、彌々喜ばして頂いて居ります。今も此の書面を書き終り、何氣なく庭園に出て、晩涼に暑を洗うて居りますと、思はず「山間忽落花一輪、長江萬里水上浮、瓢然去來到彼岸、人生百年光悠悠」の御導音が口に浮んできました。斯ういふと先生の御吟詠を、道樂的に弄ぶやうでありましたが、そうではありませぬ。清流の木葉は遂に送られて自然の大海に到り、人生百年光悠悠、佛陀慈光の上に、苦悶多き人生に立ちながら、斯く有難き生活を得るといふは何たる私の至幸で有りませうか。先生には未だ直接御面謁を得たこと無けれども、斯く親密に大悲の妙味を味はして頂くといふは、私には唯事には思へないのであります。又先般仲谷半三郎君は、先生により有難き御高訓を得たと非常に喜ばれ、又愚生も自分が救済に預りし利益を有縁の人々に語り、今迄全く慈悲に縁なかりし人達の、終に如來のお慈悲にもとづきて、淨土眞宗は眞實の宗教であること、先生の世にまします

事を知りて歡喜せらるゝを見ては、實に喜次にたえませぬ。目下は夏季講習會等の爲め、先生には御身體の疲勞を忘れて布教傳道に御盡瘁とは、何ともありがたき事でありませぬ。つまらぬことを長々申上げ、御寛恕の程をお願ひ申します。

愚生は書をかくこと、文章の綴方等は、一向に下手であります。それに昨年来永らく煩ひし加減か手が振ひ、此頃は耻しながら筆も取り兼ねる次第であります。此書面さへ大部分は人手であります。併し此頃は段々身體も恢復して居ります。申上げること澤山ありますが、今回はこれにて御免を蒙ります。

終に臨み、一言申上げますが、阿闍世王は大苦悶に陥入り、非常に佛を疑ひ恐れて居たが、不思議にも意外なる佛の恵みにあひ、もうたまらなくなり、其時王は佛に對し、無量劫地獄に落ちて苦とせんと勇んで申上げたと承はります。そして信仰以後は、唯口頭計りでなく、實際御恩報謝をせられたといふことは、兼ね〜お示しの通りであり、又先生の學舎に来て入信歡喜の方々も、茲を非常に喜びになると、お示しになつて居りますが、先生と愚生の間も又斯くの如くであります。愚生も先生に對しては、長く阿闍世王の如くでありましたが、今は學舎に來り入信歡喜の人達と同じく、實に地獄におちても苦と致しませぬ。阿闍世王が口頭丈でなく、實際報恩せられたといふは、實に有難く、妙味盡さざる所と喜ばして貰うて居ります。又汝の煩悶するは尤であるといふ處は、殊に申やうな有難い處と頂いて居ります。

先生よ、自殺を計ること數回、人をいぢめ通し、大犯罪、大亂暴をも働かんとする如き危険に迫りし愚生が、如來の大慈悲、聖人の化導、先生の感化により、斯く有難い生活をさして頂くといふは何たる幸福で有りませうか。實に先生が現今他力本願弘通の焦點にあらせらるゝといふは唯ならぬ事であると信じます。亂暴のやうなものを差上げましたか、御怒りなく御尊覽を願ひます。南無阿彌陀佛々々々。八月廿三日夜

振上る手の下から涙を

以て眺めて下さる

(夏季求道會に於ける談話)

山崎 震 雷

私も先生から、えらいお聞かせに預りて、細々ながら念佛を喜んで居る者であります。只今先生から何か話せと云うて下さることありますが、私は言ふこととしては何もありません。唯私の頂いて居る模様を話し、間違ひを直して頂かうと思ひます。

私は實は祖先は眞言宗であります。父の代になりて何ういふ御縁からか眞宗になり、私の生れてからは眞宗であつたのであります。して私の身の上の話せば私が斯くは、念佛するやうになつた動機が、お分り下さるだらうと思ひます。私は只今茲では袈裟衣を着て居ませぬが、現在袈裟衣を着る身分なのであります。併し夫れがもと、私の家は百姓で、故に只今も兄弟は百姓して居るのであります。然るに私は只今斯く自分の喜びをば人にも話し得る位置にある、之につけても本來人に話す身分で無き事を耻入るのであります。斯く私は百姓の家に生れ、此の佛のお慈悲に氣づかせて貰う縁は、私の父も百姓しながら始終念佛を稱へた人でありました。それには母は私の小供の時亡くなり、母に代はりて、より以上に私

を育て、下された祖母が非常に喜ぶ人であつたので、夫れが縁となつたのだらうと思ひます。

併し私の彌々身に覺えて萌したのは、夫れも家庭的に佛前で御禮を仕なければ御飯たべさせぬ、といふやうの事が縁になつたのはありませうが、私は氣が就きて感じたは、九歳頃であつたのであります。お寺に行きますと、たしか盆か涅槃會かであつたので、源信和尚の往生要集の地獄極樂の繪が掛つてありました。それを小供心に見ますと、實に恐ろしき様が書いてある。其處へ私の從兄で十四五年上なのが参りました。色々繪の説明を仕て呉れる。夫れが善因善果惡因惡果の理法で、此世で善いこと仕た者は極樂に行くけれども、惡いこと仕た者は地獄にゆく。其の地獄にゆく時は、先づ閻魔さんが罪を檢査して地獄に墮つ可き者は墮つ可き者と判決がある。其の時は本人が何程知らぬと言ひ張つても、言ひ張れぬ證據を出される。夫れは即ち兩玻璃の鏡といふのであつて、其鏡に向へば、娑婆で仕て置いた惡いことが何もかも皆な露はれる。其の時私が見た繪には、たしか鏡の中に二人の人物が争ひを仕て居る處が映つてあつて、夫れは一方の男が他所の物を盗んだといふのである。て斯く閻魔さんに問ひ詰められた時、知らぬといふと直ぐ此の鏡を出し、それ貴様は此の惡事を仕て居るだらうと言はれるもの故、夫れに向ふと何もかも皆な露はれて仕まふから、何んなにしたつて犯した罪の知れぬといふ事はない。そこで惡事仕といた者は皆な此の裁を受け、地獄に行くところいふ話であつたのであります。之が何ういふ事か深く私の心にさざまれました、夫れか

ら小供心にも何うか善いことを仕度い、人に賞められるやうの事を仕度い、惡いことは仕度く無い、人にくされるやうなこと仕度くないと、斯ういふ辯が出て來たのであります。

で私は夫れから小供と遊んでも、随分をとなくはなかつたのであるけれども、人と喧嘩して負けることはあるも、人を泣かしたといふことは無い。斯く私は小供ながらも何うかして善いことを仕度い、惡いことは仕度く無い、同時に人から苦情の出るやうなことや、喜ばれぬことは仕度く無いと、斯ういふ心を生じまして、夫れから夫れでやりますけれども、何うも善いことが出來無い。設へば友達が河で雜魚をとつて居る、家で禁ぜられて居るに係はず、直ぐ抜けて飛んでゆく。あとで思ひ出すと惡いことしたのが恐ろしくなるから、そつと歸つて、着物の濡れてるのを注意して見つからぬやうに隠して居る。又折々は惡いことは仕て居ながら、せぬやうな顔して虚言つく、と斯ういふ風であつたのであります。夫れから學校に行くやうになり、先生から「地獄極樂を坊さんはあるやうに言ふけれど、あんなものは有るもので無い。本讀む者はそんなこと思つてはならぬ」と言はれると「夫れではあんな繪を見たものだから、つまらぬこと思つて仕やうか無い。成る程先生の言はれる如く無いものだらう」と、然らう思ふと大に今迄とは氣樂な思ひはするけれども、矢張り然らう思ふ下から、何うか善いことは仕度い、惡いことは仕度く無い。して矢つ張り然らう思ふ丈けて、實際にはほんとに出來ぬといふ心は始終私の思ひから離れなかつたのである。段々少しづつ考へが出來て來れば來る程益々實行が六かしくなつ

て來る。然らう言ふ有様であるから、私は心中常に面白く無い其の爲めに小供の時、私は活潑でなかつたかと思ふのであります。

併し寺へは始終婆さんに連れられて參つて居つた。參つて居つても長いことぢつとして居られぬから、直ぐ出て仕舞ふ。出てからいつも歸つてから叱られはせぬかと直ぐ心配する。併し寺へ行くと、話をせらるゝ坊様がいつもニコニコ笑つて話を仕て居られる。私は思ひますには「成る程佛の側に居られる人といふものは結構なものである。側に居られるからあゝ迄ニコニコ心が楽しいのであらう。自分は晝は家に居て虫けらを殺し、寺にゆくのは晩と朝丈けだ。成る程佛の給持する坊さんのやうに、嬉しい日暮しを仕て見度い」と夫れから段々坊さんの生活が羨ましくなり、其の後御縁が熟して坊さんに成り度いと思ひ立ち、十四五の時寺に行き御經を習ひ始めたのであります。それでもう大分年をとりてから習ふたのでありますから、習ひ方も普通と違つて、正音讀で教はつたのであります。

して斯く寺に參るやうになると、初めの中は誠に有難く思つたのでありますけれども、其の中坊様の仲間の有様が今度は今迄と反對に見えて來た。結構な方面はまことに有難いのであるけれども、何しろ善き處が目について寺に這入つたのであるから、もつと善い筈ぢやがと思へば思ふ丈け益々惡い方が見えて來た。今度は之に躓いて仕舞つたのである。様子が分れば分る程、彌々淺間しくて仕やうがなくなつて來たのであります。そこで思ひますには「之は佛教といふものはま

とに結構な有難い教であるのであるけれども、今の坊様は人に嬉しさうに話しながら心に何物も持つて居らぬのである、すれば佛のことをほんたと話す立派な人になれば、屹度結構の日暮が出来るに違はぬであらう」と、有難い哉私は茲で佛教を捨てて仕舞ふことは出來なかつたのである。坊様の惡い方は見えるけれども、佛教の惡いといふことは更に思はなかつたのである。之は全く祖母のお陰かも知れぬと思ふのであります。

そこで之は何んでも自分が立派な明師に遇ふて、佛教を専門に研究し、この腐敗せる僧侶社會を改革するでなければならぬ、と一念思ひ立ちては矢も楯もたまたまやうな氣が致し、初めは廣島の進徳學校の評判を聞いて廣島に參つたのありませけれども、其處では目的が叶はず、九州にゆくといふても本當のことが聞けるといふて、廣島より九十里の道を陸行して豊前に下り、其處で四五年程、東洋師といふ眞宗の勸學さんに就いて聞いたのであります。此の方は中々の大家故、聞いて居ると道理は分る。分ると言つても佛教の道理は哲學上の大道理故、本當には分らぬのであらうも、兎に角聞く丈けは頭にこたえる故分る。斯くして道理學理丈けは茲でやつたのでありますけれども、肝腎の阿彌陀如來の十劫以來の御本願、久遠劫來の遣る瀬無き思召しといふことは、長い間唯論じて居る計りて、終に分らず仕舞ひてあつたのであります。

其の中に世の有様につき、此の佛教の道理を人に知らすには時勢を知らなければならぬ。夫れには普通學をやる必要があるといふ口實で、今度は普通學をやるやうになつた。其の間

にも此の信仰を得度いといふ念は、何うしても取れぬ、こんなことを思うて居ても仕方が無いからと、度び／＼捨てやうと仕たのであるけれども、何うしても捨てられなかつたのである。即ち私は其の間に再び京都に歸り、京都に於て宗教學校で普通學をやつたのである。即ち本派本願寺の普通教に十年居たのであります。其の間には友人と計つて信仰の會を設け、色々名師の話の聞いたり、又會員と共に大家の門を叩きて教へを請ひ、質問も仕ましたが、成る程どなたの説をきいても理屈では解けるけれども信仰の方に於ては安心が出来ぬ。其の中に何時迄も學校ばかりに居られず、本山より命令を受けて東京に出て監獄布教の研究をすることゝなつたのであります。さう斯う仕てる中に東京にありての指定の研究もすみ、其の中に群馬縣前橋監獄に教誨師として本山より出張させられる事になつたのである。

之にははたと行き當つたのであります。夫れは一つには初めて土地に參つて生活難はある。私は此の時初めて拾八圓の月給を貰うた。夫れに女房はあり小供も此の時は自分には無けれども、弟の小供を預つて居る。そのやうの有様で一方には生活難がある。其の上今度は布教師として押し出したわけて、在監者に精神上の或物を持ち施しをしなければならぬ。處が之れ迄は佛教の道理々屈をせんとやつたのであるけれども、骨はそんなに折れなかつた。これ迄は友人と互に結び合ひ、又師に聞いて解いて貰ふてもよかつたのであるけれども今度は自分が賣手の位置に座つた。爾るに私には其の渡すべき或物が無い。之れには實に苦心したのであります。監獄に

けにはゆかず、もう何ともかとも仕やうが無い。もう斯うなると絶對故、手が届かぬから放つて置くより仕やうが無い。放つて置いたら佛が助けて下さるのだらう。絶對は自分が働かぬから絶對であるのだから、捨てとけばよいのだらう。すると大方佛が助けて下されるのだらう、と斯く決めて見たもの、併し矢張り心は何うしても樂にならぬ。

其の中或る日小供を連れて書物屋にゆき、色々書物を漁つて居ると、丁度三十三年の夏の頃であつたのであります。澤山な書物の中に「信仰の餘瀝」といふ本が一部在る。信仰などとは當時不思議な本もあるものと、一寸開いて見ると有難い。初めの「宗教的同朋」といふ章を見かけたなりて早速代價を拂つて買ひ求め、直ちに歸つて讀み出したのであります。すると此の中にも讀まれた方が澤山あり、讀んで慈悲に氣づかれた方も澤山あること、思ひますが、讀みゆくと初めに先生の告白がある。中にも私が關つた善惡の約り合ひの事が書いてあつて、先づ自力修行でゆくと、自分の方から他く迄人に親切でゆけば、設ひ相手は不親切な者であつてもそんなに迄自分に對し親切に言うて呉るゝ心かと、遂に此方の親切で不親切な人迄親切になることがある。けれども之が反對に、此方はあく迄親切で向つても、向うが何うしても此方の親切を受けて呉れぬ。すると此方は是れ程迄に親切に向つても向ふは飽く迄自分の心が分らぬのかと、今度は反對に裏反つて今迄親切にした丈、よけ相手が憎くなることがある。これは何うかといふに善の力が強い時は善に平均し、惡の力が強い時は惡の方に平均するのである。前のは善の爲めに引

出て何席やつて見ても、私の話は結局歴史調べ、材料話である。肝心の佛の話は本當にする事出来ずに、丸で講談師の眞似である。口べたが講談師の眞似をせんければならぬ。彌々之は自分は偽はりをしてるのである。何も賣る物なくして賣り手になり、月給取つて喰つて居る。彌々自分は偽はりである、之には實に苦しんだのであります。茲迄申せば一緒に懺悔しますが、夫れ迄私は長々學問して、人に對しても善い方の評判を取つて居つたのである。故に茲に至りて自分の心は素寒貧である、今更人に打ち出して言ふことが出来無い。まことに辛い。この事は、かじは自分の妻にも今更言へぬ。教誨師として押出して来て、いつ角妻に對しても教誨師づら仕て居つて、今更負け惜しみで言はれはせぬ。斯くして表には出さず、内でも言へず、筆にもかゝれず、何うにも斯うにも苦しくて仕やうが無い。あゝ何うかして眞實の信心がほしい、何うしたらば得られるか、あうか斯うかと、今は友人に話す譯けには行かず、聞くべき師匠も今は無し、何んと仕やうかと、獨りて苦しみに苦しんだのであります。

其の中候かと思ひついたので、九州に居つた時使つて居つた言葉が絶對他力といふのであつた。ハ、ハ絶對他力、之は今迄人に尋ねたり研究すること、解釋しやうと仕て居たが、九州に在りて東洋門下で聞いて居た時の言葉が絶對他力。すると絶對の他力をそんな理屈や研究で得やうとするのは甚だのろい。彌々之は今日迄考えたり、こねまはしたり仕て居たが、もう夫れではいかぬ、もう仕て見やうがなくなつてしまつた、今は自分のつまらなさ加減を女房にさへ打ちあくる譯

き上げられ、後の惡の爲めに引き下げられるのである。而して實際社會の状態は、決して此の善の方が勝つことはなく、皆な日夜惡の方に落し合ひを仕て居るのである。と先づ此のことを仰せられて、次ぎに先生は私が女房にさへ言へぬ心中に向つて言はるゝには、人のことは兎に角第一自分が親切を以て人の不親切に打ち勝つ迄やりおぼせられるか何うか。先生御自身は、自分は到底出来ぬと仰しやつてあつたのである。私は茲迄讀みて、ウン之はわしの心の弱點を押えて下されたのだなと、受取つた。夫れから續いて仰しやられるには「夫れだから人間は若し茲に自分の心を眞に知り抜いて、設え此方が不親切で向つても、飽く迄然らぬ不實の心根に同情を以て、飽く迄／＼眞實で向つて呉るゝ友人がある時は安心が出来るのである。けれども自分の此の苦しい心中を知つて呉るゝ人が無い時は永劫に煩悶は止まぬ。わしも之迄長らく苦しんで何うか誰かに此の哀れな心の中を見通して、慈愛の涙を以て居つて貰ひ度い、何處かにわしの苦しい心中を眞に理解し同情して呉れる友人はないかと、色々求めたけれども何うしても見當らなんだ。處が茲にわしが氣が就いたといふは、實は長らく知つてゝ呉れる人が無い／＼と泣いて居つたのであるけれども、實は疾くより知り抜いて親切に言うて下さる親様が居て下さるのである。わしが不親切な心で人を隔てれば隔てるにつけ、其の人は彌々不便な者よと眺めて下され、此方が拳を振り上げ其人を打たんとすれば、其の振り上げる手の下からあゝ可哀相だと、涙を以て向うて下さる親様は、私の何もかもを總て知り盡くして、廣大なるお

慈悲を以て向ふて、下されたのである。わしは此の親様の廣大なる慈悲に遇はして貰うた」と、此の先生の御一言が實に私の五臟六腑に込み渡つたのであります。其處にいつて私はもう泣き伏して仕舞つた。あゝ如何にも然うであつたか。あゝ長いことわしは自分の悪いことを知らなんだ。今迄人の親切が何うの斯うの、坊さんの家庭生活の有様に迄目をつけて自分の手もとはお留守に仕て居つた。あゝ如何にも長い間申譯ない事ばかり思つて居た。あゝ成る程こんなつまつらぬ奴故、佛はお救ひ下さらなゝらぬのであつたか。あゝ此の奴の爲めの長い間の御苦勞でましたのであるか。設ひ外の人は大悲の親様が無いといはうと、わしには此の親様が無くしてはならぬと氣づかして貰ふたのであります。て其後に於きましても矢張り私はつまつらぬ心は起る、起る第二念にはあゝ此の淺聞して奴を、くゝと懺悔さして頂いては喜ばして貰うて居る。實は此間もうちで『求道』をひろげて、先生の一言一句のお言葉に、我を忘れてウーン／＼返事して居る。家内はひとりて何を言ふとるかと思議に思つた、といふやうな有様で、私は實に今日迄此の大悲の親様の前に、向ふが悪い、イヤ自分が悪いなど、自力根性で長い間親様を苦しめ通して來ましたのである。否な今も苦しめ通してありますに、此の奴をお見捨なき思召しとはあゝ實に濟まぬ、何とも懺悔の言葉もないのであります。

同時に只今の講話で承はつた『歎異鈔』十三章の先生の話である。善惡業報のこと言はれてある『歎異鈔』のあの章は私其人様に對して教誨する上に於て、こんなことを言ふては

教誨の邪魔にならせぬか、何もかも過古世の業報といふやうのと言ふたら、自然主義にならせぬかとの恐れがあつたのであります。只今の先生の話しやうとすると、夫れは自分が分つた積りて人様に話仕やうとするから出て來た間違ひで、爾るに只今先生の「斯くの如きそこばくの業を持ちける者を哀はれ」との御一言は、實に私一人が爲めの此の御一言の御教化で、私はおかげであの章に於ける私の結ばれが無くなくなり、自分は賣手であるとの考えが消えて仕まひました。深く先生に感謝申上ることでありませう。(已上)

紹介

◎他方信仰の眞味

藤 等 影 師 著

著者は薩南の自坊にありて、常に郷土の教化に餘日のなき人である。かつて求法の爲め上京し、當學會に來りて御講下された方である。方今教育の普及と共に、地方にありても所謂お説教に不満足の聲が多い。本書は即ち一つは夫れ等の缺陷に應じ、地方有識者に他方の信仰の眞味を得しめんが爲めに、一つは著者自身が押えがたき大悲の警告に催され、處ありて物せられたものである。全篇總て是れ著者が實験の告白であつて、殊に人生として大悲の至愛による以外に安住の道なき所謂を序を追うて平明に講述されてある。實験的に他方の信仰を味はんとする人にとりては、まことに好適の書であること疑はれぬ。尚ほ卷末に擧げられてある三種の入信の實例は、何れもありがたき法力の不可思議を語るものである。卷頭には紀念として往年當學會にお出で下された時の「涅槃經」如來慈父母の文を擧げさせられてある。(定價未詳、京都興教書院)

◎噴火と信念

同 上

前記藤師が、今春師の郷國の凶變、櫻島の大爆發を親しく目睹して、此の不慮の慘事につき大悲の矜哀を嘗べられたる小冊子である。島の住職藤吉氏一家の遭難談が有難く書かれてある。(同上)

雜

錄

傳道感話

○前後五十七日間夏季の傳道をして到る處に種々の御縁に遇ひ、色々の所感を得たことである、今思ひ出づるまゝに之を書いて見ようと思ふ、固より前後などは顧みる所でない。

○京都の宿を出立せんとするときに、某君が尋ねて來られた、平日東京にて來聴せらるゝのであるが偶然相遇ふたゆゑに何氣なく慕はしく跡をつけて來られたのである、私は荷物を作りつゝあつたのである、君は室の入口に坐して話さるゝのである。

○先生、私は此頃學校へ行かないのであります。なぜです。ハイ私は養子に參りて氣にくはぬから歸つて來ました、スルト祖父がモト／＼行けといふたのでありますから、立腹しまして、その様なものは學問しても駄目ぢやと申してやつて呉れませぬ。ソレナラ父様はドーシマシタ。父はかく祖父が云ふものゆゑ致方なく、學問したいけれど致方ないゆゑ、この様に東京やら西京やら信仰の話の自由を聴かして置いてくれるのです。ソレナラ兄様は、兄は煩悶をして居ますゆゑ、時々手紙をよこしますが、私が同情しないから冷淡ぢやと申して居ります。

○ソコで私の答へるには、ソレは君駄目です、其様に祖父がドーヂヤ、兄はドーヂヤ、弟はドーヂヤ、其様なことをどれほど繰返しても信仰に入れるものぢやない、祖父であらうが兄弟であらうが皆當てになるものぢやない、其様なものから同情を得やうと思つて居るが抑々間違ぢや、今君が祖父よりも同情せられず、兄弟も當てにならず、人生何れに向きても當てにならず、苦しみつゝある君の境遇が如何にも可哀そうで致方ない、如何にも君が苦しき胸中を察してくれる人はないであらう、夫を御察し下されて我能く汝を護らんと喚んで下さるのが如來の御呼聲である。

○私の友人に此の如き人がある、多年地方の傳道に従事し寺院の經營に勵心して居つた人が、一朝上よりも壓迫せられ、周囲より迫害せられ、下より反對せられ、四方八方塞がりて如何にも致方ない様になり、其上衆人の中に謝罪せねばならぬハメになりて、無念の涙を吞みつゝ歸りて來たが、恰も雪の積りたる一條道を辿りてくると、一人のあはれなる素足の乞食の小供が一人、他の小供にいぢめられて可愛相に雪の中に泣いて居る、其人は思はず知らず、ツカ／＼其側に立寄りてオマへは親はないのか、母親は居ないのか、ア、可愛相にと覺えず抱きてやろうとすると、ア、我こそ實に此通り、四方八方より迫害され、實に致方ない有様である、今大悲の親様は、ア、寒むかろう悲しかろう、タツタ一人淋しかろう直に來れ、抱いてやろうと呼んで下さるゝのが御呼聲である、といたゞくなり覺えず泣き崩れて御慈悲をいたゞいたことがあ

○君が實に此通りである、人生誰一人君が胸中を察して呉れるものがないのであろうが、夫を飽まで見ぬいて下されて、ドコ／＼までも見捨て、下さらぬが大慈悲の親様御一人である。と御話をした、スルト此君は忽ち悲涙涕泣して手にしたる手巾をしぼらんばかりである。

○先生、ア、長い間苦勞をしました、飲めない酒まで飲みて煩悶を齎やそうとしました、實は今が今まで先生まで不足に思ふて居りました、タトへ胸中を打明けたところで同情して下さらないから、駄目ぢやと思ふて居りました、分かりました、もはや是からどの様な苦勞に遇ひましたところて決してかまいません、この御慈悲一つをいたゞいた以上は更に苦勞を苦勞とは思ひませんと、かくて京都出立の時荷物の世話をして見送りて呉れたのは此入信者であつた。

○山口において郵便局員に話をした時に、局長の語に面白いことをきいた、電話の監督器といふものがある、夫を局長が机の下に置く、と交換手の横着、加入者の勝手な言ひ分、御互同志の無駄口、上役の悪口、時計の鈴の間違まで分かる、しかるに交換手連は夫を知らぬものゆゑ、皆局長に知られながら局長が知らぬものゝやうに思ふて居る、先日交換手を集めて其器械を見せてやつたら皆が顔を青くして恐れ驚いたことであつた。

○ソコで我が思ふには如來様が私共を知りぬいて下さるのが其通りである、私共がすむとか、すまぬとか、様々のことを言ふて居るが何もかも皆すつかり大悲の親様から見抜かれて居るのである、全體私共の横着根性の抜けぬのは皆大悲の親

様から御照覽下さるといふことが分からねからである、如意の釋に一は衆生の意の如し、彼の心念に従て皆當に之を度すべし、五眼圓に照し、六通自在にしてとある已上は、電話の監督器械位のことではない、無量／＼の通力を以て有形無形我等の所作、卵の毛羊の毛のさきに居る塵ばかりの事に至るまで過去も未來も現在も、三世了達の御境界は裏も表もあらばこそ、八面玲瓏所謂他心徹鑿力をもて、見透して下さるのである、此電話監督器のことに比興してすらも實に今更ながら御冥見に耻ぢ入らねばならぬ。

○かく考へるときはマルで淨玻璃の鏡の様なものである、山口縣秋吉である僧侶の人が激しき罪惡觀にうたれて告白せらるゝには、佛前に出づるときは、一々如來より我罪惡を詰責せらるゝ如く感ずる、是々が悪い、夫々がいかぬと、最後に頭をおさへて推しつけらるゝごとく感ずるとのとであつた。しかるに是は如來の我等を知りぬきたまふ一面だけである、如意の釋に二には彌陀の御意の如し、機の度すべきを觀せなして一念の間、前なく、後なく、身心ひとしく趣き、三輪開悟して、各々益したまふこと同じからざる也とある、如來は一々我等の心を徹鑿なされども、少しも之を詰責したまふのではない、斥けたまふのではない、一々我等の所作を御覽なされて、佛かねてしろしめして、煩惱の所爲なりと憐みたまふのである、狂亂所爲多きが如くと御覽下さるのである、そぐばくの業をもちける身にありけるをたすけんとおぼしめし下さるのである、其我等の罪惡を見捨てたまはぬ一々の御思召一々の御修行が如來の願行である、此の如き我等の不眞實

を飽まで見捨てたまはぬ御眞實が如來の御心である、此御眞實をきかば、如何に罪惡に苦しめるものも、煩悶に陥れるものも、律法に囚れるものも、御慈悲に融かされねばならぬ、畢竟するにすべての遠慮心は皆とられて仕舞ふのである。

○秋吉の講習會に或一人の僧侶の方が告白せられた、私は昨年嘉萬の講習會に参りて初めて氣をつけさせて貰ひました、實は昨年遊びかた／＼、恭ても圃みがてら、法を聞くべく参りました、しかるに豊浦郡地方より來れる人が、あまりに熱心に聞法入信せられたのを面り見まして、大に驚きました、ア、自分は僧侶でないか、此等の人に對して何の面目がある、今までは大にあやまりであつた、申譯がない、耻かしいやら恐しいやら、身も消え入らんばかり慚愧して夫から法に心掛ける様になつたと涙ながらの告白であつた。

○本年も此等の人々が、やはり秋吉へ來聽されたが、矢張著しく周圍に感化を興へた、特に林和輔といふ陸軍大尉の人がある、本年の如きは妻子下婢まで同道して一家擧て來聽されたのである、そして其同伴の人々が晝夜を通して熱心求法のありさまを見て、宿屋の亭主が著しく感激したのである、此主人全體地方の無賴漢である、賭博、喧嘩、道樂爲さざることなしといふ人物である、しかるに此宿泊の人々が朝から晩まで御慈悲の話でぶつとほしてある、殆んど御慈悲の話已外の話なきことではない、朝目を開くと御客は夜を徹して御慈悲を話して居る、講話がら歸るとまた其話である、夜はいつまでも其話が止まぬ、全體ナシデあの様に喜ぶのであらう全體合點がゆかぬ、餘程嬉しいことがなくてはならぬ譯であ

る、コレハ唯事ではない、不思議なこともあればあるものぢや、なんでも是はさかねばならぬと、今まで佛とも法とも知らなんだ男が大に感激して、ツイには私の前まで來り、後には嘉萬といふ所までついて來た次第である。

○此の如く著しく罪惡に氣づく人が多い、全體山口縣の人は頗る律法主義の人が多い、正しいことをせねばならぬ、少しでも間違てはならぬといふ考が著しい、しかるに人間は此考が深いほど、我身は正しい、他人は間違て居る、といふ考になり安いのである、正しいことをせねばならぬといふこと、我身が正しいことを爲て居るといふこと、は同一ではない、しかるに是が一つになつて仕舞ふのである、現に秋吉の講習會に私が、不實のものが不實のまんまでよいでは可かぬと辯じた、不實が不實の儘ではやはり不實でないか、不實なものか不實を見捨てぬ御眞實をいたゞかねばならぬと言ふた、スルト一人の僧侶の人が不審を起し、先生ナゼ不實のものが不實のまんまでわるいのでありますか、との尋ねであつた、其日は九州から遠くわざ／＼不審のために尋ねて來られた人があつた位であつたから、私の話が激しかつた、私は直に其僧侶に反問して、あなたの不實といふのはド／＼いふことを言ふのでありますか、僧侶の答にソレは凡夫でありますものみな不實であります、と申されたから、私は直に申した、其様な不實なら不實が分かつて居るのではない、夫は信仰が徹して居る言方ではないと言ひ放つた。

○スルト翌日大に其僧分がエラク氣色ばみて居る、昨日は不實のまんまでいかぬと仰せられたが、ナゼ可かないのであり

ます、全體此處には私の信者も澤山に居ります、平素教導して居る門徒も居ります、僧侶として私が悪いとありては相濟まぬとエラク立腹の體である、私は其人の言ふのをきいていかにも尤のことである、何んともありてもアナタが十分理解されぬゆゑ、怒られるも尤である、更に咎むることはない、殊に僧侶として信徒に對して面目なしと申さるゝも尤である、全體當初より貴僧が私を渴仰して求法せられ、又分かれぬから尋ねられたのであるから、初より何等の惡意なきことは分かりて居るのである、併貴僧は凡夫ぢやから不實であるといふ返答では、まだ不實が分りて居られぬのである、私が不實ぢやといふのは、貴僧が自分の考が正しいと思ふて居らるゝゆゑ、夫では可かぬと申したら、此の如く忽ち反抗して氣色ばまるゝ其心が私の所謂不實といふのである、其不實が不實のまんまで安心が出来ますかと。

○カク云ふなり僧分は忽ち氣がつきてア、申譯がありませぬ求法に來りながら先生に對して失禮を致しました、滿場の諸君に對しても申譯がありませぬと、直にキツバリあやまりて涙を流して居らるゝ、ソコで私が申すには、タトヒ法のことと言ひながら私の言ひ様が激しければアナタが激せらるゝも尤ぢや、アナタが激せられると私も激する、是即不實に對する不實といふもので、一方が不實なれば一方も不實である、御互に不實の者同志がイツマデも不實のまゝでは安全は出來ぬ、しかるにかく不實の私共に對して其不實の心の止まぬことが憐れと思召して不實を見捨てたまはぬ御眞實が如來の思召である、アナタが自分に間違ないと思はるゝものゆゑに、如何

に激せらるゝも夫はタトヒ誤りにしても無理なきこと、御覽なされて、飽まで御見捨なく、一分も一厘も退けたまはぬ御眞實をいたゞかねばならぬ、あなたも、たとひ惡かつたとあやまつたところで、却て心を傷めらるゝやうでは私は却て御氣の毒に思ふ、其惡い心を御覽なさる大悲の親様は、惡い心を惡いとして御見捨てなさらぬ御眞實をいたゞいて安心さして貰はねばなりません、かくて此人が安心されたばかりでなく、秋吉講習會は非常なる信仰の勃興を以て終結を告げたのである。

○全體山口縣の人が我身が是なりと思へばこそ主張をするのであるが、一たび非であると氣が附くと忽ち頭を下げることも著しい、我是なりと思へばこそ主張をするのであるが、實は非なりと分かりて見れば忽ち折れて仕舞ふのである、併たゝ惡いと折れたばかりで夫が信仰ぢやと思ふて苦しみつゝ腰を掛けて居る人が多い。

○嘉萬地方の如き、昨年往きたる頃は矢張自分の惡いといふ事を知らなんだ人が多かつたが、今年も惡いといふと誰もかも惡い事だけは氣附て居る、されど豊浦郡の人達に感じたる僧の如く、私の惡いことだけ分かりたまでで、いまだ如來の眞實が分かりて居らぬ、こゝに注意すべきは世には我身が惡いと思へたれば、夫が如來の力ぢやと云ふて徹底したものゝ如く考へて居るものがある、是は大なる誤である、我身が惡いと氣附いたといふのは眞の罪惡觀ではない、罪惡が氣になつたのである、たとへば借金のあることを發見したまでのことである、其借金を救ふて貰はねば安心とは言へぬのである。

○ソコで話が前に歸りて豊浦郡の人達に感じて惡いとばかり氣附いたる僧分に向て私は尋ねた、アナタは御子供を御持ちになりませぬか、其人の答に、ハイ持ちて居ります、シカラは其子は如何して居りますか、ハイ先日も障子を張り換へましたれば、其跡から、指に唾をつけて破りて居ります、ソコで貴僧は何と思ひますか、ア、私は恰も此小供の通りである、如來の御慈悲に穴ばかりあけて居ると慚愧に堪えませぬ、ソコで一步進めて申しますには、貴僧は其御子供に對して何と思召ますか、にくいと思ひますか、惡いと斥けますか。

○イエ、決してにくいと思ひませぬ、夫は我子のことであるもの、玩是なきものと思ひ、却て不慙に思ひます、可愛相と思ひます、サア、シテ見れば如來様は我等に對して仰せらるゝには、同様であります、我等の惡いことを御覽せられて、夫は煩惱の所爲である、汝の業報である、狂亂の所爲である、無理はない、尤である可愛相である、不慙である、惡いは惡いが親としては、汝が單に惡いと泣いて居るを見てはジツとして居られぬ、水火の難に墮せんことを畏れられ、我能く汝を護らんと飽まで見捨てたまはぬが如來の御眞實である、御親切である、ト話をした。

○かくて一旦惡いといふ穴の中へ墮ちた様なものも、夫を飽まで憐みたまふ御慈悲をいたゞきて氣が安らかになりた有様が親鸞にあきては、たとひ念佛して彌陀にたすけられまわらすべしとよき人の仰をかうふりて信するほかに別の仔細なきなりである、何事のちはしますか知らねども、地獄必定の我等を飽までも見捨てたまはぬといふ大悲大悲が難有い、何の行

も及ばぬといふことが可愛相であるとの思召が本願の正意である、煩惱具足の我等は、いづれの行にても生死を離るゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願を起したまふ本意、偏へに惡人成佛のためである、惡くて可いといふ意味では更々ない、惡いものは惡いけれど、其惡いことが止まぬとありて見れば、其惡いことの止まぬことが可愛相であると見捨られぬのが大悲大願の親心である。

○天災は惡い、水害は惡い、されど此の如き災害に遇へる民草を御覽なさる上御一人は惡ければ惡いだけ見捨てられぬ、益々可愛相である、不慙である、飽まで見捨てぬといふが親心である、否汝等を安らかにするまでは我も決して安らかに休まぬと仰せらるゝのが若生者の御誓である、そくばくの業をもちける身にありけるをたすけんと思召たちける本願の辱けなきよ、事實の虚妄か、眞實かの穿鑿でない、是程不實なる我身を見捨てたまはぬ御眞實が難有い、私共は不實の塊の炭團である、其不實の塊を飽まで悲憫まします大悲の火はイカナ不實な炭團の中心までも徹底するのである。

○最後に吳の青年會に於いて由村兵曹が段々此御慈悲をきゝて、夫程まで仰せ下さる御慈悲を聴聞して見れば、ハイと頂かねばならぬと思ふが、其ハイの返辭が出ませぬと申されたソコで私は親は子供がハイと返辭の出來ぬ性分であることまで見抜いて見捨てたまはぬ御慈悲であると申すなり、ア、難有や夫がために南無阿彌陀佛の御廻向て御座りますかと泣き伏して喜ばれた。

○近時都鄙到る處信仰問題の動亂著しき有様を目撃した、そ

して何れも、人生上幾多の事實によりて我身の悪しき點までは氣附けども、此飽まで見捨てたまはぬ親心が貫徹せぬがために解決がつかぬのである、今や世界は戦争によりて動亂せられ、人心も亦動亂の時機である、しかるに大悲の親心は此の如き不實不清淨の心底まで見抜きたまひて、我能く汝を護らんと仰である、動亂も狂亂も佛かねて、知ろしめし悲憫まします親心である、一分も一厘も知らしめさぬところは無い、そして一分も一厘も大悲の涙の届かぬところは無い、私が煩悶をしたるとき、友人が深く同情を注ぎて呉れると、はやく難有いと感謝の辭が出るよといが、夫が言へぬゆゑ、友人に對しても相すまぬし、又友人もあきれられてあろう、と思ふた、しかるに君の性分は神々々々、感謝の詞の出ない性分ぢやといふとまでを見抜いて、夫がハキ／＼言へぬところが可愛相ぢやとまで仰せ下さるのが、眞の友人ぢや、眞實の親様ぢや、此上言ひ度ければ勝手に言ふて居るがよい、夫は汝の性分ぢや、其性分が可愛相といふ已上は、徹頭徹尾見捨てぬ親の心は、無量永劫汝の態度の如何によりて一分一厘變り様はない!!!

◎秀存法話

一連院秀存師編 佐々木月 臨師編

一連院秀存師が大徳近世の高徳であることは、今更言ふを要しない、本書はさきに『秀存法話』の編者佐々木師が五十八歳より六十三歳に至る六年間に於ける、總會所、御坊、學寮、茶所等に於ける法話六十席を、新たに院師の草稿によりて編輯せられたものである、即ち本書を手にすれば、何人も居ながら六十年の昔に歸り、直院師の法話六十席に遇はせて貰ふことが出来る、其上院師の草稿であるだけ、最も精確に院師の教化に接する事が出来る次第である、斯の如き書の公刊を見るは常に院師を慕ふ人達の大福善なるばかりでなく、眞宗教界の爲め喜ばばならぬ、猶ほ體裁に意を用ひて、老人小兒でも讀み易きやう、文字をまばらに親切に印刷してある。(定價壹圓郵税八錢 東京無我山房)

二種の傾き

四、近頃は個人として聞きお出での方が非常に多いのである、其聞きに来らるゝ方や、又私の方より色々味はうて居らるゝ方とお話するにつけ、近頃特に私の感ずるは皆様の頭が大抵二通りになつてある、殊に信仰が徹せぬ迄に色々聞かると、方の凡ての心の傾きが大抵二通りに分れて居つて、而も著しく夫れが分れて居ることである。
五、先づお出下さる眞面目な側の方の考は、「何うも我々はこんなことではいかぬ」と一言に言ふとこの考へてあられる方が多いのである、世間の問題の上につけ「こんな不眞面目な心持ではいかぬ」又信仰上よりも「もつと喜べさうなもの、御恩報謝が出来さうなもの」と御出でなる方の十人が九人迄は大抵これに來られるのである。
六、併し夫ればかりではなく、一方に丁度之と正反對に考へてお出でになる方がある、夫れは茲にお出で下さる方々にも様々で、中には從來説教を聞きつけてお出での方もある、夫れ等の方の大抵は「此の儘ながらのお助けである、ハイと受ければお助けぢや」と、之は又樂な考へ方を仕て居らるゝ方の側である、即ち斯く一方には「もつとよくならんならぬ、こんなことではいかぬ」といふのと「悪くても此儘ながらのお助けである、ハイと受ければお助けぢや」といふのと、此の二様に分れて居るのであります。

初めより事ずみに聞いてはならぬ

七、現に昨日とお出でになつた一老人に「あなた此頃心持ちが變はらぬか」と聞くと、「イヤすつさゝ變りました」と言はれ

講 話

信心の正因

(日曜講話抄録)

近角常觀

眞宗と他宗との分水嶺

一、和讃に

不思議の佛智を信ずるを 報土の因としたまへり
信心の正因うることは かたきがなかになほかたし。

私の之より申さうと思ふ處は、この一首の和讃に盡してある。
二、信心の正因、即ち眞實報土の眞因は何かといふに、不思議の佛智を信ずることである、とである。然らば其の不思議の佛智とは如何、茲が最も肝腎で、最も深く味はなければならぬ點なのである。

三、抑々親鸞聖人が我が浄土眞宗をお作り下され、其浄土眞宗の骨目は何に在るか。眞宗と自餘の諸宗とを分つても分水嶺は何であるかと言ふと、即ち不思議の佛智を信ずると否などにある。即ち不了佛智であるか明信佛智であるかが眞宗と自餘の宗旨との分れ目となるのである。さすれば其の不思議の佛智を信ずる味ひは何うであるか。言葉には誰も言ふことなれども、茲を各自に能く頂かねばならぬのである。

「何う變つたか」以前はハイ／＼と頂くことと思ふて居ましたに、今は唯お慈悲ばかり、此のやうな者をお見捨てなきお慈悲ばかりが有難いいます」と喜んで居られる。聞き慣れぬ方には一寸分らぬかも知れぬが、ハイと受けると御助けといふのと今は是よりと變つてお慈悲ばかりが有難いといふのと、此の間には大變な違ひ目がある。

八、私は一方に斯く著しく喜ぶ方があると、自然一方のよい加減な聞きやうを仕て居る人に對する誠めやうが嚴しくなる。昨日も同時にお出での方を手酷くやつつたのであります。夫れは自分ももう分てるといふ態度で聞く人である。私が言ふには「あなたは甚だ宜しくない、佛は御助けぢやお助けぢやと、初めから事済みに聞いて居る。すると今此の老人の、ハイと受けるとお救いと言ふのと同じである。あなた自分はお助る、これでよいといつ角分つた積りて聞いて居られるも、未だ眞に佛のお慈悲が分つたもので無い」とズン々やつたのであります。

九、すると又其の人の連れて來られた同行が、之を聞いて涙流して喜んで居られる、けれども矢張り肝腎の處が抜けて居る。言はれるには「此頃らしくならして貰て有難ういいます」と「なる程夫れは何う頂かれたか」斯る者をお助けと頂かして貰ひました」と、もう茲でとんと行き詰つて仕舞うて居るのである。

一〇、て茲は老人で熱心に茲に足を運ばれるは一通りならぬ事故殊に御老人には能く聞いて貰はねばならぬのである。

一 老婆の例

一一、折々茲に聞きに來られた婆さんで、高山の出張所の婦人會の世話をして居られた老人が今度病氣になられたのであります。そしてサア死ぬとなつたら、死ぬのがイヤになつて來た。今迄はうか／＼して居つたが、彌々死なんならぬといふので、今茲に居られる老翁に向ひ「自分は彌々地獄一定が知れた」と言ふから、此の老人も一緒に涙流して喜ぶと、サア婆さんは受け付け無い。何ういふか。「自分はもう佛様にしがみつけばかりだ」といふ言葉である。「そんな安心は無いが」と其の老人態々案じて此間病床を訪ねられたのであります。

一二、そして婆さんに向ひ「前生の因縁と諦めよ」と言ふと、「そんなこと言つたとして諦められやうか」と一言に蹴られてしまつて此の老人びつくりして仕舞つた。又親戚の人が「極樂にゆかせて貰ふのだから安心せよ」と言ふたら、「そんなこととて安心が出来るか」と、えらく叱りつけたといふのである。随分聞き慣れて分つて居るやうであるけれども、唯ハイとお助けといふ言葉ばかりで、眞實の處が頂けて居らぬと、彌々となると皆なさん之れになるに決まつて居るのである。

一三、で今此老人が、度々かく諦められぬとはねつけられ、もう言ひに行けぬと言はるゝは無理のない處であるけれども、今此の婆さんにする時は、信仰問題は彌々之からが本物になる處なのである。今死ぬとなると唯もうイヤだ、苦しくならぬといふ處が實に婆さんの眞劍の處であるのである。

一四、で一方御老人に言ふ時は、「故に眞に頂いた者なら、實に之からが言うてきかさんならぬ處なのである。今婆さんは今迄の信仰が駄目になり、落ちるより外なくなつて仕舞つて

居る。そこで今こそ頂かさならぬ時が來たものなのである。言ひにくいのは平日無事の時の慰めになら、然う言つて、いふかも知れぬが、今こそ眞に知らさねばならぬ。

一五、そこで私は先日暇を見て、婆さんを訪ねたのであります。婆さんは痛く瘦せ枯れて病床に寝て居つた。此の婆さんが矢張り二つ傾きになつて居るのである。即ち平日長らく茲に聴きに來るは來てたのであるが、肝腎の處は聞かずにいつもの説教聞く氣で、只ハイと頂けばお助けと、言葉通りにこしらへて喜んで居たのである。故に即ち今度彌々となれば今迄のこしらへ物は皆な消え、今度は反對に諦められぬとなつたものに外ならぬのであります。

此の儘ながらでは安心出来やう善が無い

一六、そこで今茲で片方の眞面目に聞く人の側は、即ち自分は何うしても喜べぬといふ問題であるのである。之は此の間も越前から態々來られた人があつて、それが「何うしても頂かんならぬ」といふので來られたのである。其の人の考へては「自分は何うも喜べぬてよくない。こんなことでは仕やうが無い。自分は何れ丈け聞いても分らぬ。こんなことでは法の器でないかと思ふ」と言はれる。斯く言はれる其處が又非常に味ひのある處なのである。

一七、即ち茲で兩方をよせると能く分る。即ち一方では斯く眞地面目な人の側は「これはいかぬ／＼」といふのであり、一方は今の婆さんのこれ迄頂いて居た「ハイと頂くとお助け」といふので、尤て正反對であるのである。そこで此の兩方をよせると、今實際は「こんな喜べぬことでは仕やうが無い、こ

んな淺ましいことではどもならぬ」といふ苦しみてある處へ、「其儘ながらのお助けである、ハイと頂くとお助けぢや」と、これではどだい軽くつて安心ならぬやう善が無いのである。自分が今悪くして仕やうがないと泣いて居る處へ、「佛は其の悪い者でもだじないと言つて下さるのだ」とは、到底眞實の安心が出來やう善が無い。

然らば大悲の眞實は如何

一八、すると今眞實の處は何うであるか。今の婆さんに私が話した處を申すが、殊に御老人にはお分りよく最もよからうと思ひます。

一九、今茲に居られる老人は、其の婆さんに「佛教聞いて居る者が何事も因縁と諦めなどもならぬ、無常と此世は初めからさまつて居るのである。御信心聞いて居る者が、思ひきらなにかぬ」と言はれたのであります。けれども實は婆さんにする時は、言はれる迄も無く其の事はよく分つて居るのである。分つても諦められぬ處が實に人間の本心であるのである。二〇、之は昨日も私は或る喜んでお出の方に然う申した「あなたそんな喜んで居られるけれども、今私のとこから歸りの電車の中で倒れぬとも限らぬ。現に此間山座公使は思ひがけない死にやうをせられた。然うなつたら、あなたそんなに喜んで居つても、其の喜びは續くまいが、然うなつたらこんなに早からうとは思はなんだがの愚痴は必ず出るにきまつて居る。それにあなたのやうに安す喜びしてはいかぬ」と申した。すると其の方の言はるゝ處は、結局其の仕やうの無い者が、死ぬとお助けを蒙ると言ふ安心の仕方の外になかつたのである。

今婆さんにする時は斯る一應のお助けなら今迄百萬たら聞いて居る。聞きながら第一死ぬのがイヤで苦んで居るのに、死ぬとお救ひでは何うしたつて安心出来やう善が無いのである。二一、爾らば私の申した處は何處であるか、たつたひと處であつたのである。私が婆さんに言つたには、「なる程あなたの心淋しいは尤である。今迄聞いてた積りであつたのであらう。も夫れが言葉丈けてあつたの故、今となつたら如何にもあなた淋しいであらう。又人として一代積んだ財産を、イヤな者に渡すのは残念だらう。諦められぬも實に無理が無い、尤もぢや。併しあなた、随分友達もあつたのであらうも今自分が其の苦しい心をかへて死んでゆく、其の苦しい心中を眞に打明けて彌々相談出来る者は誰も有るまいに、今佛のお慈悲は、然うて無い。今あなたの其の苦しい、淋しい、諦められぬ、どもならぬ、夫れを言へば他の人は皆な呆れ驚いて相手になつて呉れぬ、其の言ふに言へぬ苦しいあなた的心中を、夫れだから其處を殊更に遣る瀬無く思召し、其の、他の者の相手に仕て呉れぬ、その汝が可哀相で、汝が悪しければ悪しき丈け彌々捨てられぬ、とある廣大の思召が佛の御呼聲がある」と唯これ丈けを申したのであつたのである。

二二、すると餘り言葉が早いので、何うかと思ふた程に唯一言「ハイ」と喜ばれた。餘り話が短つた故、今も他の方に其後何うかとお尋ねすると、矢張り「あれから様子が變つてしまつた」といふお話であるのである。私が一言言ふなり「あ、分りました／＼」と喜んで下されたのである。側から見て居る人には殆んど分らぬ程であつたのである。

お助けに先き目をつけぬ

二三、處て之は何うかと言ふに、今迄のは唯結果の極樂行きやらお助けやら、結果の都合の好いことばかり頂いて、肝腎の御親切も慈悲の方が疎張り頂けて居なかつたのである。夫れ故唯結果ばかり喜んで居る信心であると、斯く彌々となるとサア喜べぬ、諦められぬ、心淋しい、地獄行きぢや、となつて来る。すると今度は茲て一方の眞面目な方に一轉して、「もつと本氣にならぬならん。こんな喜べいでは仕やうが無い。」仕舞ひは「自分は信仰聞く器でないかしらぬ」などいふやうのことになつて来るのである。之が又甚だよろしくないのである。

二四、一體佛教聞く器で無いとは抑々何事ぞ。全體汝が當り前では仕やうのない器、人から呆れられ、相手にされぬ器である故に、大悲の親は其の仕やうが無い器が不便で見捨てられぬとある廣大の眞實でましますので無いかと、茲は何うしても斯う言はねばならぬのである。大悲の御まことは、茲でもうこの仰せの外に無いのである。私の婆さんに申した處も要するに唯是れ丈けのことであつたのであります。

二五、て茲は從來の同行信者の人には、能く聞いて貰はねばならぬ。今彌々となつて「もう喜べぬ、仕やうが無い、先きは地獄である、眞暗である」と惱んで居る人に唯「其の儘ながらのお助けぢや」「悪くてもよいのぢや」といふのは、結局「先さへさへゆけばお助けぢや、死ぬると救うて貰はれる」といふ丈けのことになつて仕舞ふのである。そんなことで今安心が出来る位なら、今の婆さん如き前から聞き飽きる程さいて居

つたのである。

二六、爾るに今佛の眞實は、そんな極樂にゆくことや、助ることを先き言ふので無い、死ぬるとなれば、私の方は唯心淋しい、助からぬ（助ることでは決して無い）其の仕て見やうなき地獄行きの私の、其の仕て見やうなき處を兼ねてより御推量下されて、其の仕て見やうなき處が如何にも苦しからうと疾くより絶對の哀れみを以て待ち受けて、下されたが親様の眞實であるといふ、茲を頂かなくてはならぬのである。皆なが大抵茲の處でお助けや極樂に行くことを先き目當てに仕てしまふから頂かれぬのであります。

或青年者の例

二七、猶ほ今一つは、十年程前から此の學舎に來られる書生の方があつて、現今は仙臺の高等學校に居られる方がある。先達つて静養の爲め上京せられ、多年御縁の方故、此の學舎にお入れ仕て置いたのであります。

二八、處が此方は多年信仰問題に心懸けて居られる方なるに係はらず、病氣といふに近頃は案外私の話を聞く模様が無い。折角有縁の方故、一つ確かり話して見度いと私の方でも思ふて居つたのである。處が此間私の許に來られ、先づ此方は斯ういふ事を言はれたのである。夫れが實に面白いのであります。

二九、言はるゝには「何うも先生の話は分りませぬ。」私は何故かと聞くと「先生のは喜べ無いのが哀はれ、可哀相といふも話是有るも、助けてやらうとも仰しやらす、下される處の物が無い、全く空つぽのやうに思はれます。空つぽでは安心出来

ませぬ、下さる物を頂き度う思ひます」と、先づ斯ういふ話であつたのである。

三〇、そこで「夫れでは君のは何うか」と反問すると、「私は『歎異鈔』を讀むと念佛と書いてある、故に念佛を頂くこと、思つて居ります」と、甚だしつかりして居る。此の念佛を下さる處が私には有難いのに、先生のは唯哀はれ、可哀相ぢやと丸で飯を喰ふことを目的と仕て居るのに、喰へぬところが哀はれぢやといふやうな話で私には分りませぬ」と、何うです皆さん喰ひ度い人ばかりで有らうと思ふ。丸で親の苦勞は口先き丈けで言うて居つて、金さへ取つて仕まへばよいの量見て大抵の人が聴きに來て居られるのではあるまいか。金に目がついて居る故、如何程言つても届かぬのであります。て私は之を聴くなり「能く之れ程迄考へた」と思つた。

三一、其の時私は先づ内心きくなり説明が仕度つた。「わしの言ふのは其の何れの行でも及ばぬ者の爲めに、御苦勞の念佛である」と言ひ度くて／＼ならなかつた。併し茲て之を言ふと「ハア分りました」丈けで止まつて仕まうのである。

三二、そこで私はいきなり先づ叱りつけた。「君、先生のは何うの斯うのと一體君はわしを相手に宗乗でも研究する氣で居るのか。茲は眞宗でも行信の關係と言つて、随分一代の學者が頭を費しても分らぬ問題であるのである。夫れを君は何か道樂にても研究する氣で來て居るか」と、其の怒り方が、實にひと通りでなかつた。其の間に一言半句の説明を雜えず、をこつたも／＼、其中夜の十二時過ぎになり、怒り草被れてしまつて彌々説明する根氣はなくなる、唯をこつて／＼をこり

抜いて仕舞つて、其人あとから言ふには「先生がもう歸へれと言はるゝかと思つてると、又をこり出される、何うにも斯うにも歸り機さへ無つた」と言はるゝ程にあつたのであります。

さては多年の工夫間違ひなりしか

三三、夫れから其人歸つて寝ながら色々考へると、ひよつと「先生があれ程やかましく言はれる處を見ると、或は自分の考へてる處が違つて居はせぬか」と、然らう一念思ひ出すなり、サア今迄長い間自分の頼みと仕て居つた考へが皆なガタ／＼と碎けて來た。

三四、其中翌日になり、外の方が聞きに來られた席へ其方を呼び、茶を呑みながら私が言ふには「皆なが眞直ぐに茶を呑みさへすればすく呑めるのである。處が皆んが銘々の出來ぬ處を哀れとある肝腎の思召の方は退け物に仕て置いて、耳の處へ茶碗をあてがつて居るから呑めぬのである」と、此の話がえらく耳にとまり、「成る程今迄はすつかり間違つて居た。之は一つ聞かう」と思つて居らるゝ、矢先さへ私が重ねて「君まだ自分の間違ひが分らぬか。此方の間違つてると何が佛より御覽下さると哀はれてならぬのでは無いか。此方は何か失敗して親に金の整理をつけ下されとの思ひを持つて向つて居る。親にすると其奴は、金を渡すすく遁けて仕舞ふ奴故、金やらうとは言うて下されぬ、それよりも親にする時は、まだいつ角出來る氣で、金呉れ／＼と言つて居る此方の根性の間違ひがあぶなくて／＼、見放しにされぬとある御親切にましますのである。親は私の考へが徹頭徹尾間違ひで、如何にしても間違ひより離れられぬ、其の其處が彌々哀はれて捨てられぬ

とある思召でまします」と、つい何気なく此の事を話した。三五、之は序に、よく人生上の出来事につき、先生に何か善き方法は無いか、て御訪ね下さる方がある。私に方法がある程なら、何も慈悲を要しはせぬのである。総て人生は最後の處になつて来ると、最早や何うにも斯うにも仕て見やうが無い。仕やうが無いから仕やうの無いままに放つて置くなら、慈悲でも何でもあらせぬのである。其の仕やう無い處を見る佛智不思議は、夫れだから其者が飽く迄捨てられぬとある。思召しが彌々不思議の不思議でまします處なのである。三六、て今の方は、今の話をきくなり、夫れ迄は岩に水かけた具合で、何うしてもしみ込まぬ。して横の事ばかり思つて居つたのに、成る程之れは方角違ひばかりを仕て居つた。して其の地獄一定の逆も助らぬ者を飽く迄やるせなき御まこと、聞くなり、宛然海綿に水のしみ込む如く頂けたと、初めてお喜び下されたことであつたのである。三七、て今日世間では、自覺々々と、自覺がやかましい事になつてある。して自覺とは何か獨りて力みかへる事の如くなつてあるのてありますけれども、眞の自覺とは斯く自力の千萬仕方なき事が分り、して其仕方なき者が遣る瀬無き仰せ一つに蘇生らして頂いた味ひが即ち自覺であるのである。而して斯く仕方の無きやり通せぬ者程彌々哀はれに捨てられぬの佛の思召は實に遣る瀬無き、佛智不思議の御愛憐より出づるのである。故に「不思議の佛意を信するを、報土の因と仕たまへり信心の正因うることは、かたさがなかなほかたし。」信心の味ひは之れに極まるのであります。(已上)

求道講話概況

第二求道會(前號ニツク)(聴講乙記)

六月二十七日。通「唯佛獨知」なり。日々日暮しの上から凡ての人の苦しむ處は自分斯くあり度いと思ふ事が出来なからである。自分が立派に出来ぬとか、煩悩になやまさるとか、人がよくして呉れぬとか皆各自に苦しむのである。そして各自が苦しむ事を自分の力にて何とかよくして行き度いと思ふのであるが如何にしても解決出来ぬ。そこで愈々苦しむのである。處て他方信仰の肝心なる處に斯く吾々一人一人が積んで居る事、眞に知つて遣る瀬無き思召し下さると云ふ事が佛の恵みであると云ふ唯一點である。そして何人にも能はぬ處を唯如来様御一人が知るしめし下さるのである。何處かとりどころが有る様にして居る間は佛に助けて頂くと云ふ事は分らない。大無量壽經に「如来の智慧海は深廣にして涯底無し。二乗の測る所に非ず。唯佛のみ獨明かに了したまふ。」とあり。吾々がして見様なき有様を佛は兼ねて知るしめし下さるのである。歎異鈔に「よるこぶべきこゝろを、おさへてよるこぼせざるは煩悩の所爲なり。しかるに佛かれてしめしめて、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのこときのわれらがためなりけりとしられていよ／＼たのもしくおほゆるなり。我々が突當つて千萬仕方なき處に唯佛のみしめしめし給ふ御慈悲を頂くのが信仰である。吾々がよく仕やうと思つても出来ないのを見よなばして、悪いは悪いが悪いのが見捨てられぬと實意を以て向はれるが故に、如何なる不實の者も佛のみ明かに知るしめし御慈悲が願いて下さるのである。是が不思議の佛智である。云々

求道會館建築寄附

金第十一回報告

(九月中旬マデ)

- | | | | | | | |
|-------------|-----|--------|------------|-----|--------|-----|
| 一金壹百圓也(第三回) | 日本橋 | 加藤竹三郎殿 | 一金參圓也(第二回) | 小石川 | 鈴木本 | 弘殿 |
| 一金五拾圓也(第三回) | 満州 | 向坊久五郎殿 | 一金參圓也 | 東京 | 柴田清 | 作殿 |
| 一金參拾圓也(第四回) | | 無名氏殿 | 一金貳圓也 | 鹿兒島 | 柴山清 | 一殿 |
| 一金貳拾圓也(第二回) | 本郷 | 無名氏殿 | 一金貳圓也 | 長崎 | 楠活 | 雷殿 |
| 一金拾圓也 | 長崎 | 駕淵英雄殿 | 一金貳圓也 | 長野 | 月岡 | 殿 |
| 一金拾圓也 | 札幌 | 佐伯正殿 | 一金貳圓也 | 廣島 | 大道高四郎殿 | |
| 一金五圓也 | 北海道 | 齋藤修平殿 | 一金貳圓也(第二回) | 府下 | 本多惠孝殿 | |
| 一金五圓也 | 麻布 | 橘地龜次郎殿 | 一金壹圓也(第三回) | 大阪 | 爲貴七覺殿 | |
| 一金五圓也 | 米國 | 原田勝次郎殿 | 一金壹圓也 | 熊本 | 前田才子殿 | |
| 一金五圓也(第二回) | 大分 | 安倍清殿 | 一金壹圓也 | 長崎 | 長井大 | 懂殿 |
| 一金五圓也 | 長崎 | 加來庄策殿 | 一金壹圓也 | 同 | 越中 | 聞行殿 |
| 一金五圓也 | 同 | 馬場清五郎殿 | 一金壹圓也 | 同 | 伊東 | 磐根殿 |
| 一金五圓也(第二回) | 若松 | 中野善藏殿 | 一金壹圓也 | 番川 | 遠山 | 榎治殿 |

一金壹圓也	日向巢下平吉殿
一金壹圓也	同 巢下友助殿
一金壹圓也	同 奥野熊右衛門殿
一金壹圓也	同 野添勇吉殿
一金壹圓也	同 山内始殿
一金壹圓也	同 有尾森右衛門殿
一金壹圓也	同 坂下太郎吉殿
一金壹圓也	同 村岡はる子殿
一金壹圓也	同 井ノ口仁次郎殿
一金壹圓也	同 眞方法信會殿
一金五十錢也	同 有田四郎殿
一金五十錢也	同 山崎直助殿
一金五十錢也	同 西元矢太郎殿
一金五十錢也	同 坂下萬四郎殿
一金五十錢也	同 井ノ口すえぎく殿
一金五十錢也	同 福岡藤井まき子殿

總計金參百〇參圓五拾五錢也

累計金壹萬參千八百
四拾七圓貳拾六錢也

右之通り候也

大正參年九月二十日

世話人總代 長尾收一
會計監督 西澤善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存
候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社
東京銀行振替口座東京七九八番に御振込被下度候當方よ
り差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏
面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道
會館設立會計監督西澤善七」の宛名必ず御記入願上候
二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求
道誌上に報告可仕候
三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜
敷候

近角常觀著

懺悔錄 附録「歎異鈔」

第八版 定價 二十錢
郵稅 四錢
袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救濟の眞意を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と其後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇傾に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ「懺悔錄」の名ある所以にして一讀入信の少からず。

人生と信仰

第五版 定價 卅錢
郵稅 四錢
袖珍美本

第一章 人生問題と信仰
第二章 悲觀思想と信仰
第三章 倫理力行と信仰
第四章 犯罪心理と信仰
第五章 社會問題と信仰
第六章 國家秩序と信仰
第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。▲以上の二書は是非どなたも讀んで下さい

發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

▲發刊以來大方各位の喝采を蒙り既に四ヶ月を以て完結せんとする本全書は眞宗に取て大藏經たるの(詳細目錄希望者)みならず一般佛敎界は勿論、苟も日本佛敎の精髓を究めんとする人士に取て無二の一大叢書なり(申込アリタシ)

▼第壹回 史傳部 大經解拾八卷(道隱) 觀覺聖人弟子廿四聖傳十卷(道隱) 安樂集(慧然、慧琳、道祥、善意等)五部拾貳卷

▼第貳回 護法部 垂鈎卯拾貳卷(曇龍) 淨土論註(慧雲、大瀧、實雲等)三部拾四卷 叢林集九卷(惠空)故實傳來鈔四卷(淨慧) 選擇集津津錄拾壹卷(道隱)同津津錄四卷(慧雲)紫雲殿由緣記拾六卷(明專)

▼第參回 雜部 淨土論註(慧雲、大瀧、實雲等)三部拾四卷 叢林集九卷(惠空)故實傳來鈔四卷(淨慧) 選擇集津津錄拾壹卷(道隱)同津津錄四卷(慧雲)紫雲殿由緣記拾六卷(明專)

▼第四回 史傳部 論註開書六卷(宣明)略論二卷(大舍)外章部 關典錄拾叁卷(琢成)三經文類記一卷(雲駐)外

▼第五回 註疏切部 觀經依釋六卷(義教)外三部拾壹卷 對外篇(對淨土宗祖道等)拾八部參拾卷

▼第拾壹回 護法部 觀經依釋六卷(義教)外三部拾壹卷 對外篇(對淨土宗祖道等)拾八部參拾卷

▼第拾貳回 雜部 本典光融錄下(玄智)貳拾貳卷 考信錄五卷(玄智)外八部九卷 觀經講記九卷(靈趾)小經錄二卷(履善) 對外篇(對華嚴、日蓮宗)六部廿一卷

▼第拾參回 護法部 觀經依釋六卷(義教)外三部拾壹卷 對外篇(對淨土宗祖道等)拾八部參拾卷

▼第拾四回 詩文部 本典徵決上(興隆)九卷 空惠、大舍、女俗、法雲等廿八部四拾壹卷 易行品講讀四卷(隨惠等大派先哲) 七祖傳大谷派講者傳等八部廿五卷

▼第拾五回 史傳部 易行品講讀四卷(隨惠等大派先哲) 七祖傳大谷派講者傳等八部廿五卷

▲缺本の部分新に再版成り五十部限り下記方法にて豫約加入を諾す

甲 三十回分一時購讀(運賃共)金五拾壹圓五拾錢(残り四ヶ月) 乙 毎月二回分宛購入(運賃共)金五圓貳拾八錢(但必前金)

丙 毎月一回宛購入(運賃共)金貳圓六拾六錢(但必前金) 丁 全部前金拂購入(運賃共)金六拾貳圓(同上)

藏經書院 (振替口座東京) 二六三三番

眞宗全書

裝釘麻布褐色堅牢優美 菊版壹冊五百頁毎月月刊發行 全部四十八冊貳拾四圓 自 大正貳年九月至同四年四月 拾貳拾圓 發行所 京都市油小路通松原上

藏經書院 (振替口座東京) 二六三三番